

五章 プール

帰宅するなり部屋に駆け上がり、ベッドにダイブ。そのまま俯きで目を閉じる。
涙がにじみ、胸には悲しみと苦しさが渦巻く。
やり場のない怒りと悔しきでベッドを叩くが、何もできない。叫んでみても心は晴れない。
ただただじたばたもがけだけだった。

しばらくして母が帰って来た。夕食時になっても下りてこない和正を心配して声を掛けてくれたけど返事をする気にならない。

その内に眠くなり、そのまま……。

―― ねえ、かずまさん……。

―― なんだよ、ゆうな。

―― あたしね、おおきくなったらかずまさんのおよめさんになる。

―― おおきくなったときのことなんてわかんないだろ。

―― 大きくなっても和正君のこと、大好きだよ。

―― そんなことわかんないよ。

―― わかるもん。

―― わかんない。

―― なんていじわる言うの？ 優奈のこと、嫌いになったの？

―― そんなつもりは……。

―― じゃあ、なんで最近、私のこと、避けてるの？

―― え？

―― 私のブルマを盗んだのだって……。

―― 俺じゃない。

―― 最低……。

―― 優奈、信じてくれよ。

―― 田所君、もう、話しかけないでね……。

―― おい、待って……。

―― さよなら。

―― 待ってくれ……。

―― いこ、文雄君……。

―― 優奈……待って……。

目を覚ますと天井に向かって手を伸ばしていた。

瞼の上を腕で隠して目をぎゅっと瞑る。

涙が滲んでいた。それは目が覚めたからではない。胸にある痛みが原因。

幼い頃の口約束。照れくさくて、女の子と一緒に居るのが格好悪くてつつけんどんにして泣かせて、そして謝ってまた一緒に……。

それが今も……。

「……」

頬を叩いて立ち上がる。おかしな姿勢で寝ていたせいで身体が痛い。和正はベッドから降りると伸びをする。昨日は夕飯を食べていないから腹が減っていた。風呂に入らず寝たので汗臭い。ひとまずシャツとズボンを脱ぎ、風呂へ急ぐ。

「あら、和正、早いね」

母はあくびをしながら台所に向かっていた。

「おはよう。ちょっと風呂入るから」

和正はどたどた走り、早速パンツを脱いでシャワーを浴びた。

べっとりとした汗を洗い流し、涙の痕をごしごし擦る。頭を強く、身体も強く擦る。そのまま内側まで一気に擦り落したい。

優奈はもう居ない。いつまでも女々しく過去を覚えているのが辛く情けない。それをきっちり流してしまいたい。もう優奈は……。

「いない！ 俺はいいんだ、これで！」

シャワーを強く出して叫んでいた。

「どうしたの？ 和正」

「なんでもないよ」

叫び声は聞こえていたらしく、母は不思議な顔で和正に尋ねる。

「ちょっと喧嘩してさ。それで悔しくて」

「もう、なんで和正はいつもいつも喧嘩ばかりして……」

最近影を潜めていた和正の喧嘩の早さ。ようやく収まったのかとほっとしていた母だが、彼の額のごぶを見てため息を着く。

「……ちょっとあんた、額、どうしたの？」

和正はパンをかじりながら母を見る。どうやら今朝初めて知ったようだった。電話は来なかったのだろうか？

「和正、今日は？」

「ん？ 補習と水泳部の練習があるよ」

「そう。水泳も良いけど、勉強もしっかりしてほしいわね。優奈ちゃんも夏期講習だっていうのに、あんたときたら……」

「優奈は優奈だよ。あいつは学びたいんだろ」

「和正も頑張ってるじゃないと……」

「もう離れたんだからいいだろ！」

思わず怒鳴っていた。

「ごめん、ちょっと優奈と喧嘩じゃないけど、いろいろあってさ」

「そ……う。ふうん。そっか……」

母も優奈と和正の距離を感じており、そのことで荒れていると勘違いし、それ以上は空気を読んで黙っていた。

「ごめん、母さん。ちょっとあって」

「んーん、でも、勉強はしておいて無駄じゃないから」

「わかったよ」

和正は素直に頷き、朝食を平らげると歯ブラシ片手に二階へ走る。急いで補習の準備をした。

夏の涼しい時間を補習で潰す。夏休みの過ごし方としてこれほどまでもつたない過ごし方も無い。和正は板書もそこに、窓の外を見ていた。

外では運動部がグラウンドで練習をしている。

水泳部の練習は午前中のみで、午後は生徒へ解放される。

今日はギリギリ練習に参加ができる予定だったので、早く補習が終わらないかと考えていた。

「おーい、田所、ちょっといいか」

窓を見ていると杉田が教室にやってきて手招きする。

「はい」

補習中にも関わらず、呼び出しを受け、和正は教員に一礼して出て行った。

「なんですか？」

「うむ、田所の昨日の喧嘩についての処分が決まったんだ。そのことだ」

「処分ですか」

たいそうな物言いに和正は吹きだしそうになっていた。

「お前は生活態度が悪い。しばらくお前は部活停止だ」

「そんな……、部活は関係無いじゃないですか」

「そうでなくとも赤点が多い。夏休み中はしっかり勉強をするように」

「ちよっと待ってください！　なんで俺ばかり！」

「これはもう決定したんだ。もしこれ以上ぐねるようなら停学だ。もちろん、他に何か問題を起こしても停学だ。わかったな」

「……」

「返事はどうした」

「……はい」

一方的な通告に和正は不満しかなかったが、反論の余地も無い。せめて補習の後は練習をしたかった和正だが、それすらもできなくなり、夏休みの過ごし方に暗雲が差し込めていた。

「おーい、和正、どうしたんだ？」

同じく補習を受けていた芳雄がやってくる。補習の途中で呼び出しを受けた彼を心配しているようで、表情は陰しい。

「ああ、ちよっくら停学　一步手前になったわ」

「なんだよ、まじか？」

「部活禁止だつてさ。　ったく、これじゃあ　一体いつ練習すりゃいいんだよ……」

「大変だな……。まあ、お前の場合、補習があるから参加もできないからそれほどでもないんじゃないか？」
「少しでも参加したかったんだけどな」

最近の鬱屈した気持ちをすっきりするために広いプールで思い切り泳ぎたい。そう思った矢先の禁止処分に和正はうなだれる。かといって無理に参加すれば今度は停学だ。どこまで本気かはわからないが、従う他になかった。

「まあ仕方ないさ」

「そうか？ うーん」

芳雄が代わりに悩んでくれるので和正はかえって冷静になれた。その同調してくれる気持ちがありがたいとすら思えていた。

「まあいいや。暇なら俺にバタフライ教えろよ。いいだろ」

「なんだよそれ。俺は部活禁止だっつーの」

「市民プールでやればいいじゃん。俺も夏休み明けまでにバタフライと背泳ぎ覚えたいんだよ。約束だろ」

「そんな約束してねーよ」

「いいじゃん！ いいじゃん！ そんなつめたくしないで」

和正はべたべたと引っ付いてくる芳雄を引き剥がす。

「暑苦しっての。離れろ」

「だってーん、つめたいんだもーん、こうやって温かくして溶かしてー」

「わかったわかった。教えるから、離れろ。じゃないと殴るぞ」

「……はは。ったく、照れちゃって」

「うっせーな」

笑顔の芳雄に和正はふうとため息をついた。

彼の明るさは疎ましくも、見習うべきものかもしれない……。

次の日、補習が終わると芳雄に引っ張られ和正は市民プールへ行った。

歩きながら背泳ぎのやり方を教えてもらいつつ歩く芳雄は、街路樹にぶつかっていた。

「上半身はわかったけど、下半身はどうすりゃいいんだ？」

「それはだから、こうなんだよ」

片足を上げて泳ぐ時の足の動きを見せるが、まるで電柱におしっこをしている犬のようで間抜けだった。

「あはは、ばかみてー」

「おい、教えるのやめようか」

「悪かったよ、そんな怒るなって」

「ったく……」

和正はむっとしつつ、急ぎ足になる。そろそろ気温も上がり、早くプールへ行きたい気持ちもあった。

「あれ？ あれって市川さんじゃないか？ どこ行くんだろ」

芳雄が市民プール近くのバス停に居るのを見つけて言う。

「優奈か……」

優奈の姿を見ると心が痛む。だが、彼女を責める理由は無い。あの状況では自分を信じろと言うのも無理があり、文雄の言い分もわかる。

「……」

わだかまりを持ったままいるのは辛いけれど、彼女が自分を拒みつつあるのもわかってる。だから、できるだけそっけなく、何もないように、もう関わらないように……。

「おーい、市川さん」

「あ、渡辺君、田所君」

芳雄が手を振ると優奈も手を振り返してくれた。和正は軽く頭を下げるとそのままプールへ行こうとする。

「おいおい、和正、少しは待てよ。そりや顔合わせにくいだろうけどさ……」

無理やり引き止められるのはうざいけれど、それを強く振り払うのも意識させてしまう。あくまでもそっけない態度を取るべきと、ひとまず歩を止める。

「……や、やあ」

「うん、おはよう」

「市川さん、どこ行くの？ あ、俺達は今からプールね。ちょっとバタフライとか教えてもらいたくてさ」

「そうなんだ。楽しそうだね」

「じゃあ、一緒に行こうよ」

「うん、でも、今日は夏期講習があるから……」

「え、夏期講習……うえ、俺達は補習だったのに、市川さんはゼミか……。皆毎日毎日勉強ばっかだな……」

「レベルが違うけどな」

「それを言うなよ」

調子の良い芳雄に苦笑いしてしまう。そのクロールを教えるにしても、和正がしっかり監修しなければならず、どれから教えたものかと悩んでしまう。

「……優奈さん」

「あ、文雄君」

バカ話をしていると文雄と千絵がやって来る。彼らはあからさまに不機嫌で芳雄と和正を見ていた。

「君たちは？」

「ん？ ああ、市民プール行く途中だったんで」

「そうか。なら行きたまえ」

「なんだよ、行きたまえって……、別にいいじゃん、少しぐらい」

「君達が優奈さんに何をしたのかを考えれば当然じゃないか」

「文雄君……、その話はもう……」

「あのなあ、だから俺も和正も犯人じゃないって……。他の誰かが……」

「とかなんとか言ってさ、本当は犯人なんじゃないの？」

千絵が不審そうに二人を見る。

「うっせーな。お前関係ないだろうが……」

「何よ、そうやってまた暴力？」

「暴力って……」

「だってそうじゃない。大崎と喧嘩してさ……。ほんと最低。すぐ暴力振るうんだもん」

「いや、でも、あんだけ馬鹿にされたら怒るだろ。怒らないほうが変だぞ」

「口でいえばいいじゃない。すぐに暴力に頼る」

「だから、それはまあ……」

芳雄もそれ以上は庇えず、口ごもる。

「俺も悪いと思ってるし、相沢さんが怖がるのもわかる。邪魔しちや悪いし行こうぜ」

「お、おい、和正」

「ったく、なーにが怖がるよ。誰があんたなんか怖がるっての。このブルマ泥棒」

「ちよっと千絵……」

昨日の出来事を思い出し慌てる優奈だが、和正は背を向けて早足で市民プールに向かう。

「あ、おい、和正……。それじゃあ市川さんまた今度ね……」

別れ際ぐらいいは笑顔で言う、芳雄も和正を追った。

「たく、お前かっこつけてるつもりかしんねーけどよ、そういうのマイナスだと思うぞ」

「なんだよ、急に」

「言い訳すべき時とそうでない時を考えろってことだよ。今のまんまだと、言い返せないヘタレでしかないぞ」

「……へたれか……。その通りだよ」

優奈と文雄の立ち話を聞く限り、へたれしみたい。精いっぱい恰好を取り繕っても、もう隔たりができています。せめてこれ以上、情けない姿を見せないためにも、こうして突っ張りたかった。

「ん？ あ」

道路を走るバスで優奈が手を振っていた。芳雄が笑顔で振り返すが、その隣には文雄が居た……。

午後まで補習がある日は学校のプールを利用していた。部活は禁止だが、部活ではないのだから問題無いと言い訳をしつ……。

相変わらず男子は外で着替えるので貴重品は持ち込めない。

プールへ行く途中、和正はふと部室を見た。鍵が紛失したままだというのであれば、せめて柔剣道場の女子更衣室を使うべきではないかと思いつつ、プールへ行く。

「なあ、なんでまだ水泳部の部室で女子が着替えてるんだ？」

「ん？ ああ、そうだな。鍵、見つかったのかな？」

連日の練習でバタフライを教えてもらった芳雄はそこそ前に進めるようになっていた。続いて背泳ぎを教えるべく、くれとなったところで、雨が降ってきた。

学校のプールでは屋根が無いのでぼつぼつ当たる。水の中なので大したことも無いのだが、柔剣道場の裏の荷物が濡れても困ると慌てて上がった。

「ふう。雨が降ってきやがったか」

「あーあ、やっぱ市民プールで練習したいぜ」

雨脚が強まる中、芳雄は愚痴をこぼす。にわか雨に足止めされてしまい、ひとまず校舎に逃げ込む。

誰かの忘れ物の傘でもあれば拝借しようと物色していると、法子が階段を降りて来た。

「……」

和正は会いたくない相手を見てわざとらしく顔を背ける。しかし、彼女は彼に用があるらしく、つかつかとやって来る。

「何をしているんですか？」

「何も？ 雨が降ってるから帰れないだけです」

「……」

努めて冷静に言い放ち、彼女を見ない。

「君はいつもそうやって逃げるのね」

「何が言いたいんですか？」

「おいおい、和正、落ち着けよ。っていうか、先生は何か御用ですか？」

「私は今、田所君と話しているのです」

「はあ、はい……」

「俺は何も話すことなんて無いですよ」

「話す時は相手を見なさい」

「……だから、話すことなんてありません」

睨み付ける和正に法子は若干怯む。その仕草にふっと笑ってしまい、それがさらに法子の不快を買う。

「君は本当に態度が悪いのね。そんなんじや社会に通用しないわ」

「あの先生、そういう話はまた今度で……」

「私は今田所君と話しているんです。口を挟まないで」

「あー、ええと、そうだ、そういえば鍵は見つかったみたいですね？　もう水泳部の部室が更衣室に使われているみたいです……」

強引に話を変えようとすると、途端に法子は眉を顰めてばつがわるそうになる。

「そのことは……後日改めて……」

「？　良かったじゃないですかねえ。見つかって……」

言葉を濁す法子を見て、芳雄は抜け目なく食いつく。

「……」

どうやら予想通りらしく、芳雄は話題を逸らすのも含めて陽気な声で続けた。

「良かったな。和正、なあ。お前が鍵盗んだって嫌疑は濡れ衣だってことじゃん」

「それはまだなんとも言えないわ。田所君がこっそり忍ばせたのかもしれないし」

「……え？」

「……忍ばせた……？」

腕組みをして法子は強がるが、芳雄も和正も彼女の言い回しに足を止める。

「だから、君が盗んでいない証拠にはならないって言ってるのよ」

「は、……なんだ、やっぱり先生が持ってたんだ」

和正は法子に向きなおると、つかつかと歩み寄る。

「お、おい、和正？　ちょっと落ち着けよ……」

物々しい雰囲気を感じた芳雄が二人の間に入ろうとする。

「やっぱり先生が受け取ってたんじゃないですか。それを俺のせいにしてたんですね！？」

「それは、だから……」

「だから俺は何度も言ったんです。先生に返したって……。それなのに先生は未だに非を認めないで責任転嫁するんですか？」

腹の中から怒りがこみあげてくる。泥棒事件の遠因でもあり、和正は冷静ではいらなかった。

「だから田所君、それは私も間違いをしたけれど、君にも問題があるんだから……」

「俺に問題があるのとあんたが問題起こすのは関係無いだろ！」

「……！！」

和正の怒声に法子も怯む。彼女は芳雄を見るが、芳雄もこれまでの彼女の和正への態度を知っているためか、庇う気にもなれない。

「なんだ、おい、何を騒いでいる！」

騒ぎを聞きつけた杉田がやって来ると、法子ははっとして立ち上がる。

「生徒指導をしていましたが、田所君が反省をせずについて……」

「また田所か……、全くお前は問題ばかり……」

「待ってくださいよ。水泳部の鍵、やっぱりあったんじゃないですか。それをまず謝ってくださいよ」

「部室の鍵？ ああ、それか。そうだな。確かにあれは浜崎先生の勘違いだった。人は誰でも間違いを起こすんだ。先生だって完璧じゃないんだからしょうがないじゃないか。それをいつまでも引きずっているのは男らしくないな。だいたい普段から疑われる態度を取っているのが問題なんだ」

「そうやって話を誤魔化すんですか！？ 浜崎先生が完全じゃないのはわかりますよ。実際間違いを認められない欠陥人間だ。そうでないってんなら、間違ったことをちゃんと謝ってくださいよ。そのせいで俺が疑われたんだ。その責任を取るのが大人の態度なんじゃないんですか！」

「なにいい？ お前はそうやって屁理屈ばかりこねて、先生にたてつくのか！」

杉田は和正の胸倉を掴むと、そのまま下駄箱に押し付ける。不意を突かれた和正は成す術なく抑え込まれる。そのまま首回りが締まって息苦しくなる。

「ぐ、てめえ、そうやって暴力にたよってんのはお前も一緒だろ」

「これは指導というんだ。お前みたいな言ってもわからない馬鹿にはこうやって力で押さえつけるのが効果的なんだよ」

「ただの暴力だろうが！」

「ちよ、先生、おちついてくださいよ。和正だってそんなつもりじゃ……」

芳雄が慌てて二人を止めようと間に入ろうとする。しかし杉田はそれを突き飛ばす。

「いて……」

しりもちを着いた芳雄を見て、和正は身体がかっと熱くなった。首を庇うのを止めて思い切り杉田を殴る。姿勢が悪いせいで全然力が籠らないが、それでも怯ませることができた。その隙に下駄箱を蹴り、絞められていた腕を引き剥がした。

「お前、教師に手を上げてタダで済むと思うのか！ このことは君の両親にも報告させてもらう。夏休み明けに無期限停学だ。覚悟しろ！」

「上等だ！ やってみろよ！ この暴力教師！」

叫ぶ杉田に和正も言い返す。

「お、おい、和正、落ち着けよ。な、謝ろうぜ。まだ今なら……」

「今更謝って済むと思っているのか！ 大人を舐めるとどうなるか、しっかり勉強するんだな」

「……杉田先生……」

高らかに宣言する杉田だが、いつの間にかやって来た松子の声にはっとする。

「これは今井先生、いつからそこに？」

「騒いでいるから気付かないんですよ。私はさっきから居ました」

「そうでしたか。今、田所を指導していたところで、彼は反省もせずに暴力を……」

「何が暴力ですか……。首を絞められて友達を突き飛ばされたら反撃するのは当たり前じゃないですか……。そうでなくとも普通、身体を自由を奪われた人間は手足をばたつかせて状況を脱しようと反射的に行動を起こすものです。それに、鍵の件もやっぱり浜崎先生の瑕疵ですよ。立聞きさせてもらいましたけど、先生が謝ったよう

には聞こえません。それなのに田所君だけを責めるのは間違いです」

「ですが、彼は暴力と暴言を……」

「ですから、そうやって生徒を追いつめてどうするのです。先生方は生徒を指導するのが仕事であって、あれがわるいこれがわるい、停学だなんだと騒ぎ立てることじゃないでしょう。人が完璧になれないのはしょうがないとして、過ちをおかしたら、非を認めて謝罪する必要があります。貴方達ができない作法を要求するのですか？それが貴方達の思う教育なんですか？」

「……それは……」

松子の言葉に法子はうなだれ、杉田もばつがわるそうに視線を逸らす。

「もし田所君を停学にするのであれば止めませんが、これまでのことを私も教頭先生とお話をさせてもらいます」

「それは……その……」

杉田は旗色が悪くなり、口ごもり、興奮が冷めて冷静になる。

「なら今回のことは両成敗ということ……」

不満そうにため息を吐き、杉田は戻ろうとする。

「失礼します」

「浜崎先生、貴方は謝罪がまだですよ」

「すみませんでした」

「誰に謝っているんですか。ちゃんと田所君に謝らないといけないんじゃないんですか？」

「それは……教師として威厳を損なうことに繋がります」

「浜崎先生、謝ることが威厳を損なうことではないの。貴女が道理の通らないことをすることが威厳を損なうの。わかるかしら？」

「……はい、わかりました」

松子に言われて法子はしぶと和正の前に立つ。

「鍵の件は私が紛失していました。ごめんなさい」

「……それで終わりですか？」

「これ以上何しろって言うのよ」

「あんたがなくなりたいせいで俺は犯人と疑われたんだ。そういうのもちゃんと説明しろよ。クラスメート全員にだ」

「そんなことできるわけじゃない。先生は忙しいのよ」

「何が忙しいだ！あんたがいい加減なことしたから俺は疑われて」

「それは君の生活態度が疑われるようなことばかりしているから」

「あんたが鍵を失くさなければ盗難騒ぎだって起こらなかったろ！」

「それは君が鍵を盗んで……」

「二人とも静かになさい！」

再びの言い合いに松子が声を張り上げる。

「田所君に言い分もわかります。クラスメート全員に疑われたままというのは学校生活に支障がきます。けれど、クラスメート全員に連絡するのも浜崎先生の業務に支障がきます。だから、休み明けにしっかりと時間を取って話し合いをしましょう。それでいいですね」

「……はい」

「……わかりました」

お互い納得はできなかったが、言い合ったところで平行線になることもわかっている。

「それでは失礼します。仕事がありますので……」

法子は踵を返すと階段を駆け足で登って行った。

「生徒指導も仕事でしょうに……」

松子はふうとため息をつき、困ったように頬を撫でる。

「くそ」

憤懣やるかたなしな和正は昇降口の段差に座り、悪態をつく。

「はあ、良かった。ほんと今井先生が来て良かった。先生、ありがとうございます」

芳雄は心底ほっとした様子で松子に頭を下げる。

「ほら、和正も」

「ああ……、なんか毎回毎回お世話になってすみませんでした……」

「うん。ええと、そうね。一度教頭先生とお話をして、生徒指導の在り方を考え直さないとイケないかしらね……」

君達も早く帰りなさいね」

「はい、失礼します……」

笑顔で帰りを促すと、松子は保健室へと戻って行った。

「なんか今井先生って立派だよな」

「あたりまえだろ」

「いや、そうじゃなくて、なんていうかな……」

芳雄は説明が難しそうで腕組みしていたが、答えが見つからずに「まあいいや」と投げ出す。

「ほら、帰ろうぜ」

「ああ」

水泳の練習をよりずっと疲れた二人はぼんやりしながら帰路についた。

今も雨が降ったままだが、このまま学校に留まっても良いことがないだろうと考えての強行突破だった。

「あーあ、散々だな」

「そうだなー」

「なんか良い事ねーのかよ！」

「ねーよ！」

小ぶりになる雨の中、家路を走る。

「なんかごめんな」

「あ？　なんか言ったか？」

「いや、なんでもね」

「ああ」

雨の中、バス亭へと走る。少しは雨が凌げる。十分に濡れたとはいえ、顔が濡れながら走るのも前が見えにくい。雨が多少でも弱くなってから帰ろうと、屋根の下へとたどり着いた。

水着入れからタオルを取りだし顔と頭を拭う。ベンチに腰掛け、一息ついていた。

その向かいのバス亭には……。



七月の終わってから八月の終わりにかけて鬼石神社で祭りの準備が始められる。

町内会で子供神輿が制作され、人手が足りないこともあり、和正も手伝いをする事となった。

午前中は補習か神輿制作の手伝いを行い、午後は鬼瓦第二校のプールで練習をする。部長にも部活禁止の旨が伝わっており、夏休みの大会は無理でも九月の大会には間に合うようにと言われた。

「ほらほら、ちゃんと作れよ。終わんねーと祭りに行けないぞ」

集会所を走り回る子供たちを嗜めつつ、低学年の子に飾りの作り方を教えていた。

「あら、優奈ちゃんは一緒じゃないの？」

向かいのおばさんが不思議そうに尋ねてくる。おしゃべり好きな人でちよっと苦手だ。

去年は優奈に誘われて手伝いをしていたけれど、今年は和正だけ。「昨年までは一緒になって神輿を担ぎ、去年はそれを並んで見ていたのに。」

「優奈は夏期講習があるから参加できないんですよ」

「そうなんだ。ふーん」

値踏みするように和正を見つつ、ハサミを振り回す男の子を叱る。

「喧嘩でもしたのかと思って」

「ははは」

喧嘩はしていないけれど、それよりもっと隔たりを感じていた。

時間が経つにつれてそれも自然に思えてくると思っていたが、何の因果か帰り道で二人を見かけてしまう。

文雄と優奈。優等生二人が同じ塾に通う。前期も委員長として合唱練習や試験対策などで一緒に居た。まとまりの無いクラスで試行錯誤を繰り返して頑張ってきた仲だ。自然と距離が近くなるのも頷ける。

対し自分は練習をさぼり、喧嘩をし、赤点ばかりの劣等生。鍵のことは担任の瑕疵によるものだが、それでもブルマが鞆の中から出たことに変わりない。

「ふう……」

「あ、また田中の兄ちゃんがため息ついてる」

「田中じゃなくて田所。ったく、何度目だ」

「やーい、恋煩いだー」

「はあ？ 何の話だよ。ったく……」

ませた発言にムキになる気にもなれない。代わりに向かいのおばさんを見ると、慌てて視線を逸らしていた。きつと余計なことを吹き込んでいるのはあのおばさんだろう……。

日曜日、朝から芳雄がプールに行こうと誘いに来た。

「なんでまた朝もはよから男とプールなんだよ」

「しゃーねーだろ。これも海で恰好つけるためなんだからよ」

「海？ 行くのか？」

「いや、行かないけどさ。そのうち女の子誘って泳ぎに行きたいじゃん」

「ふーん」

「そんときに泳げなかったら格好悪いじゃん」

「お前なあ、言っとくけど、プールで泳ぐのと海で泳ぐのは全然別だぞ。沖合に出たら泳ぐどころじゃないし、

バタフライや背泳ぎなんてしてる暇ないからな」

「恰好だけでいいんだよ。細かいことは良いからさ」

「まったく……」

そんなものかと思いつながら、並木道を歩く。日曜の朝は人の出も多いが、市民プールは少なかった。

「おお、貸し切りじゃーん」

芳雄は広いプールとまばらな人を見て上機嫌で走り出す。

「おいおい、プールサイドを走るなよ」

飛び込もうとしたところで慌てて止め、プールサイドで準備体操をさせる。

「なんだよ、いいじゃねーか」

「あのなあ、そういうことしてると出禁になるぞ」

「……わーったよ」

ぶつくさ言いつつ安値で遊べる市民プールを追い出されても困ると黙る。

準備体操を終え、バタフライの練習をする。水しぶきが他より激しいので、端っこへ行く。

「まず腕の振りだな。力任せじゃなく、波をかき分けるようにするんだ。叩きつけると水面だって痛いからな。

足は水を蹴る感じでやるんだ」

実践を交えつつ、まずは真似をさせる。形になったところで個々の動作を指示する。もともと運動神経の良い芳

雄は飲み込みが良く、すぐに覚えた。

問題は少々水しぶきが多いところ。隅っこで人が少ないのは良いけれど、遠回りをする人を見るとバタフライは早かったと思えた。

「おい、芳雄、背泳ぎに変えようぜ」

また人が出てきたところで提案するが、調子が乗り始めたらしく、どんどん泳いで行ってしまう。

「待て、芳雄！」

オレンジのビキニ姿の女子とピンクのビキニの女子が来たところで慌てて止めるが、水しぶきと泳ぐ音で芳雄には届かない。

「きゃあ！！」

和正が止めるのも間に合わず、水しぶきは走って来た女子に思い切りかかってしまった。

「ちょっと、かかったじゃないの……」

「ごめん、今、バタフライの練習をしていたんだ。今から背泳ぎに変更させるよ」

和正はゴーグルを上げて頭を下げる。

「あ、またあんた？　ったく、最悪」

「田所君、来てたんだ」

「ん？　ああ、なんだ、ゆ……市川さんか……」

「え？　……あ、うん」

「芳雄はあっちで練習するように言うよ。おい、芳雄、行くぞ」

「え？　なに？　なんだよ、ナンパか？　お前も隅におけないな……って、市川さんじゃん。あれ、今日ってゼ

ミは？」

芳雄はゴーグル片手にプールサイドにやってくる。

「今日はお休みだからみんなプールに来たんだ。二人も？」

「ああ、泳ぎを教えてもらう約束でさ。バタフライの練習してたんだわ。ごめん、水かった？」

「平気だよ。すぐに入るし」

「あはは、そっか。だね。よし、それじゃあ俺が華麗なバタフライを……」
「それはもういい。ったく、芳雄も調子に乗るな。まだ人に見せられるレベルじゃないし、迷惑になるから行くぞ」

「迷惑だなんて、そんなこと……」

「いいよ、行こうよ。あんな奴ら相手にしなくていいじゃん。あんな泥棒」

千絵の嫌味に腹を立てつつ、言い返してもプールだけに水掛け論になると飲み込む。

和正は自分の未練がましさに落胆しつつ、芳雄の方へと急いだ……。

++

「ねえ、プール行かない？」

ゼミ帰りのバス、後ろに座っていた千絵が背もたれから乗り出してそんな提案をした。

「プール？」

「うん。だってあつついし、たまには息抜きも必要かなって思ってた」

ゼミの教室ではクーラーが効いているけれど、ガンガンに照り付ける太陽の下では、帰りのバスを待つ間の数分で、汗だくにさせられる。

夏休み中、体育の課題として学校のプールに5回行く必要もあり、あとあと帳尻合わせするぐらいなら気分転換がてら、それも良いと思えた。

「いいよ。文雄君はどうする？」

隣に座る文雄を見ると、彼は驚いたような顔で自分を指差していた。

「僕もかい？ いいの？」

「なんで？ 一緒に行こうよ。ゼミも終わったんだし、ね？」

何を遠慮しているのだろう？ 少し顔が赤いけど……。

「うん、わかった。僕も行くよ」

「よし、じゃあ決まり！ それじゃあ、一旦家に帰ってから、市民プールね」

「え？ 市民プールにするの？ 学校じゃなくて？」

「だって、学校のプール小さいじゃん。それに、スクール水着なんてダサイしさ。たまには可愛い水着とか着たくなるじゃん？」

千絵はまるでグラビアアイドルのようなボーシングをしていた。千絵は結構スタイル良いし、スクール水着のずんぐりしたデザインは似合わないのかもしれない。

「あたしは別に……」

「えー？ そんなこと言わないでよ。優奈もなんか気合入れた水着あるんでしょ？ ねえねえ……」

実のところ、スクール水着で済まそうと考えていた優奈は千絵の言葉に真っ赤になって手を振る。

「ふーん、こんな時も真面目なんだね。優奈」

「う……」

真面目と言われるのは褒め言葉のようにみえて、実際は面白くない子、地味な子という意味が含まれている。というか、そういう意味でしかない。

最近、よく千絵がつかかることが多いけれど、それがなぜかちくちくした気にさせられる。どうしてかはわからないけれど、そのままはいはいと頷くのが癪だった。

それに気合の入った水着ならある。

去年、海へ一緒に行くつもりで買ったビキニの水着。色合いは健康的なオレンジのものだけれど、かなり見栄を張ったものだ。

残念ながら着る機会はないまま箆笥の肥やしになってしまっている。

「ねえ、筒井君も見たいよね？ 優奈のスクール水着以外の水着」

「え……僕は、その……」

「ふふーん、だって」

悠然と微笑む千絵にむっとする。いちいち文雄を持ち出さなくても良いのに。

「わ、わかったわよ。あたしもスクール水着じゃないの持ってたから」

「へえ、優奈、水着あったんだ」

「あ、あるもん、水着ぐらい」

「へえ……」

意外そうな千絵はぼかんとしていた。少し勝った気がした。

——うん、大丈夫！ おかしくないもん。それに、新しいことにチャレンジしてみないとね！

優奈はガッツポーズを取りながら、ふんと鼻息を荒くした……。

一旦家に帰り、箆笥の奥から水着をしまっていた袋を取り出す。布地の少ないオレンジのビキニを見ながら、少し後悔してしまう。

やはり恥ずかしい。笑われてもスクール水着でいい。そう思い、ビキニを水着袋に戻す。

去年の夏、和正と一緒に海に行こうと思って買ったのだ。けれど、実際には勇気が出ず、市民プールで胸に名前の付いたスクール水着で特訓三昧。おかげで体育の授業でも恥をかかなくて済んだけれど、夏の日の一ページには余りにも湿っぽい。

その和正とも最近……。

和正と距離を置くことで彼の自立を促す必要性は正しいと思うけれど寂しさがあった。そしてその一方で、彼の鞆から出て来た自分のブルマ。

クロッチの白い布地が何か液体でも染みたのか黄色くカピカピになっていた。

最初、それが何かわからなかったけれど、千絵に精液だと言われた。

男の人が自分で性器を弄ってエッチな気持ちになって精液を出す自慰行為。優奈のブルマはその「おかず」にされたのだ。

精液は白いのではないのかと不思議に思ったが、それどころではない。

きっと田所が優奈のブルマを盗んでオナニーをしたのだ！ 渡辺と貸し借りをしようとして、それを見つけたのだ！

千絵の推理は無理があると思いつつも、誰かが自慰行為をしていたことは否定できない。

誰が犯人なのかはわからない。

以前なら和正がするはずがないと言いきれたのに、最近……。

そんな気持ちを払拭するためにも少し話がしたい。電話ではなく、しっかりとお互いで目を見て……。けれど、彼は逃げるかもしれない。逃がさないためには？ 彼の得意なことならあるいは……。

「……プールぐらい、いいかなあ」

勉強はともかく水泳は彼の得意分野。彼を甘えさせるのではなく、彼を頼るパターンなら過保護ではないはず……

…。

「……」

そう思い、優奈は知恵に電話をしていた。

『もしもし、優奈？ どうしたの？』

受話器の向こうでセミの音。もう市民プールに向かっているらしく、優奈も急ごうと袋を手取る。

「えとさ、あの、他の友達とかも、誘って良い？ かな……なんて思ってる」

『……それってさ、田所？』

「……え？ あ」

まるつきりお見通しの千絵に言葉が出てこない。彼女のあからさまな不機嫌そうな声を聴く限り、どう言葉を繕っても、答えはノーだろう。

「うん、えっと、ほら、田所君、水泳部だし、巧いから教えてくれるかなって……」

羽のさ、そりゃあいつは水泳部だよ？ でも、それだけじゃない。巧いってことと教えることは違うし、あんな乱暴な奴、嫌よ』

「乱暴って……そんなこと……」

優奈だっけ見たでしょ？ 先生に乱暴な態度取ってたし、あいつは女に暴力振るうDV男なんだって』

「う、うん。ごめん」

『……もういいからさ、早く来なよ。あ、それとも今さら水着姿に自信が無くなったとか？』

「うっ、そんなことないもん。もう、あたしのビキニ姿見て驚かないでよね！」

『へー、優奈、ビキニ着るんだ。結構大胆じゃん』

「あ……うー……」

『それじゃね。暑いし、先入ってるかもしれないからね』

「うん、わかった。すぐ行くよ」

通話が終了すると同時に優奈は水着袋を見る。そして紺色の布を取りだし、代わりにオレンジの布を入れた……。

十十

市民プールへ向かうと、日陰で文雄が待っていた。その隣では千絵が汗を拭いていた。

てつきり先に入っていると思ったので、急いで駆け寄った。

「おそーい！」

「ごめんごめん、お待たせ」

頭をぼんと叩き、お詫びする優奈。千絵は腕を組んで唇を尖らせていたけれど、文雄は優しそうに笑っていた。

「まあま、約束の時間は過ぎてないだし、さ、行こうか」

「うん」

彼の笑顔に隠れてこそそと館内に踏み入れた……。

更衣室は衝立でいくつもパーティションを区切られている。

洋服売り場の試着室のようなモノがいくつも並んでいる感じだった。

優奈は隅っこの個室を使うと、大き目のタオルで身体を隠しながら出る。

「ちょっと優奈、そんなタオルもってプール行くの？　ちゃんと置いて行きなさい」
けれど千絵にきつく絞られ、置いていくことに……。

「……」

女同士、水着姿になった優奈を見て、千絵はしばらく無言だった。

つま先から胸元までじろじろ見て、むっとした様子になる。

「んもう……」

去年の自分と夏の開放感が恨めしく思えた……。

「文雄君、お待たせ」

「……」

シャワーを浴びて消毒層につかる。出たところで準備運動をしていた文雄が気付いて振り返った。だが、彼は呆気にとられた様子で優奈を見て、視線をきよろきよろさせていた。

「変かな……」

「そ、そんなことないよ。すごく、刺激的だよ……」

そう言うとき文雄は背を向けて腰周りを整える。

彼は学校指定のスクール水着。こういう時、男子は楽なものだと思えた。

「さ、いこっか」

千絵に押されるまま、優奈は初心者用コースへと向かった。

初心者コースにも先客がいるようで、誰かが泳ぐと、ばしゃつと水が掛かった。
今から入るとはいえ、不意にしぶきを掛けられると驚いてしまう。

そして驚いたのが、そこに居たのが彼だったから。

「田所君、来てたんだ」

「ん？　ああ、なんだ、ゆ……市川さんか……」

「え？　……あ、うん」

市川さん……。

名字で呼ばれた。

優奈は驚きと、よくわからない感情で身体が一瞬強張った。

自分も和正のことを名字で呼ぶのに、どうして自分が名字で呼ばれたらそんな気持ちになるのだろう……。どうして彼は自分を名字で呼ぶのだろう……。そんな虫の良い苛立ちと困惑があった。

「芳雄はあっちで練習するように言うよ。おい、芳雄、行くぞ」

彼はいつものように逃げる。自分の前から去っていくのだ。

「え？　なに？　なんだよ、ナンパか？　お前も隅におけないな……って、市川さんじゃん。あれ、今日ってゼ

ミは？」

芳雄がゴーグル片手にプールサイドにやってきた。

彼は調子が良いから、もしかしたら橋渡しをしてくれるかもしれない。そんな期待を込めて水を向ける。

「今日はお休みだからみんなプールに来たんだ。二人も？」

「ああ、泳ぎを教えてもらう約束でさ。バタフライの練習してたんだわ。ごめん、水かったの？」
「平気だよ。すぐに入るし」

「あはは、そっか。だね。よし、それじゃあ俺が華麗なバタフライを……」

「それはもういい。ったく、芳雄も調子に乗るな。まだ人に見せられるレベルじゃないし、迷惑になるから行くぞ」

「迷惑だなんて、そんなこと……」

いつものように図々しくしてほしいのに、和正がそんな後ろ髪を断ち切っていく。

「あ……待って……」

呼び止めようと、手を伸ばそうとしたところで肩を掴まれる。

「いいよ、行こうよ。あんな奴ら相手にしなくていいじゃん。あんな泥棒」

「うん……」

——田所君。

——市川さん。

そんな何気ない呼び合いが、心に引っかかる。

もしかしたら、とんでもないことをしてしまったのかもしれない。

頭にぽんと軽い衝撃。千絵の放ったビーチボールが当たったらしく、ころころとプールサイドに転がって行くのが見えた。

「おーい、ゆーな？」

「優奈さん？　どうかしたの？」

最初は笑っていたけれど、呆けた様子の優奈に二人とも不思議そうな顔になる。

「ごめん、ちよっとぼうっとしてた。えへへ、拾って来るね」

慌てて取り繕い、優奈はプールサイドに転がったビーチボールを拾いに行った。

「……よいしょっと。あ……」

転がっていたビーチボールを拾おうとしたら、ぬっと出た男の手に遮られる。

「ねー、彼女、いけてんじゃないん？　そのビキニ、ぶりっぶりですっげーセクシーなんすけどー！」

「え！　あの……」

唐突な煽る言葉に優奈は慌ててビキニ姿を隠してしまう。身体に自信が無いわけではないけれど、こうしてあからさまに性的なことを言われると恥ずかしい。

それにここは市民プール。ナンパ行為は迷惑行為だ。優奈は恥じらいつつもナンパ男に抗議の視線を向ける。

「お？　なんだ、委員長じゃん」

「大崎君？」

声の主は浩司だった。

日焼けした身体、脱色気味の髪、赤いパンツスタイルの水着で最初誰かわからなかった。

「なーんだ、委員長か。どうしたん？　そんな恰好で。ああ、まさかデートとか？」

「え、デートって、あたし、えとその……友達と来ただけだし」

「ふーん、友達と……へー……」

じろじろと値踏みするように見つめる浩司に、優奈は居心地の悪さを感じる。

「あの、ボール返してくれないかな。皆も待たせてるし、お願い」

あまりつつけんどんにならないように柔らかな物言いを選ぶ優奈だが、浩司は気にせずボールをぼんぼんと弄ぶ。

「んー、どうすっかなー……」

弱小とはいえバスケットボール部員だけあってかボールの扱いはお手の物。優奈の手の届かないところでひよいひよい操っていた。

「……どうしたの？ 優奈……って、大崎……」

戻ってこない優奈の様子を見て来た千絵は、浩司を見てあからさまに嫌そうな顔になる。

「なんだ、相沢もか……へえ……」

にやりと笑うと千絵の胸元から足元までじろじろと見る。そのあからさまな性的な視線にも関わらず、千絵は毅然と睨み返す。

「ねえ、返しなさいよ。職員に言うわよ。そしたらあんたら出禁なんだからね」

「おー、こわ……。っていうか、俺ら遊んでるだけじゃん。そんなこと言うなって」

「あたしは別にあんた達と遊んでるつもりなんて無いですから」

「ふーん、優奈ちゃん、相沢の奴、あんなこと言うんだぜ？ なあ、俺達、遊んでただけだよ」

「えと……その、それならボール返してくれないかな？」

すりよる浩司に優奈は引きつった笑いを浮かべつつ、折衷案を出す。

「だってよく、俺ら出禁にされちゃうし」

浩司はボールを大吾の方へと弾く。彼はさっとボールを拾うと、また浩司の方へと戻した。

「ちよっと、返しなさいよ！ほんと怒るわよ」

「もう怒ってんだろ！ けけけ」

「ははは」

笑いながら言う二人に千絵も優奈もしやうがなかった。

「二人とも、どうしたんだい？」

「文雄君、実は大崎君と笹井君がビーチボールを……」

「ふーん、そうかい、それじゃあ彼らに貸してあげればいいよ。僕らはあつちで水泳の練習をしようよ」

文雄はそう言う二人をプールに戻るように促す。

「ふん、しやうがないわねえ……」

ビーチボールで遊ぶことよりからかうことの方が目的だろうと察し、千絵もひとまずビーチボールを諦める。

「じゃあね」

優奈も二人に続いてプールへと戻った。

「なにになに？ 練習するの？ ねえ、いいんちよ、水泳の練習？ よっしゃ、俺らも練習しようぜ」

ビーチボールで気が引けないとわかると、早速二人はプールへやってくる。そして禁止されている飛び込みをしておおきく水しぶきをたてた。

「わ！ こら、君達！」

「ちよっと、飛び込みは禁止でしょ！」

文雄と千絵は思わず文句を言うが、詰め寄る大吾と浩司に二の句が継げぬ。

「なんだ？ なんか用か？ 俺ら練習してんだけど！？」

「……だから、その……」

「ああ、そうか。お前らも練習してんだっけ？ ならよ、泳げよ。ほら、早く」

「……」

「ほらいインチョコ、泳げっての」

無言の文雄を見て、大吾は半笑いで彼の肩を掴み、プールへ押し込む。

「わわ！ ぶぐあ、ぶぶ」

運動の不得意な文雄は少しばかり水中に押し込まれただけでもがきだす。ばしやばしやと水しぶきをたてながら必死で大吾から離れるも、何も言えずにただ水を拭うだけだった。

「あの、二人とも、乱暴は……」

「委員長二人で特訓してたとか？　ねえ？　そうなん？　ああ、イインチョ、運動音痴だもんなくあはは！」
勉強ではかなわないけれど、運動ならば浩司や大吾の方が上。ここぞとばかりに大笑いしながら煽る。

文雄はそんな安い挑発など無視するつもりだったが、周りの視線が集中すると、真っ赤になる。

「ね、笹井君、大崎君、喧嘩しないでよ。ね？　ね？　仲良くしないと皆追い出されちゃうよ。だから」

「ふーん、そうだなあ、俺らも追い出されたくないし……、優奈ちゃんがそう言うなら、仲良くしてあげてもいいけどなあ」

「ほんと？　良かった。じゃあ、文雄君も大崎君も仲直りしてね」

「ああ、いいよ。いいんちよ、悪かったな、許せよ」

「……」

「ほら、大吾、お前も謝れって」

「なんでだよ。俺は別に」

「いいじゃん、謝っとけ。てめ、空気読めよ」

にやりと笑う浩司を見て、大吾は最初不満気味だったが、頭を下げる。

「悪かったよ、委員長。許せ」

「ああ、わかったよ。うん、別に僕もそこまで気にしてないし」

「はあ……良かった……」

形式上、仲直りをした三人を見て優奈は安直な安堵の息を着いていた。

「でさ、仲直りついでに、俺らが泳ぎ方教えてやるよ。イインチョさ、体育の時とか全然泳げてなかったじゃん。あれ、かつこわりいから直そうぜ」

「僕は別にかっこわるくても……」

「そう言うなって、友達だろ。ほら、来いよ」

浩司は文雄の腕を取ると、第一レーンの方へ引っ張っていく。

「……」

「まずクロールな。ほら、俺らのやる通りにやれや」

浩司はそう言うで大雑把な動きで水しぶきをまき散らしてクロールをする。

「ほら、お前もやれって」

「うん」

大吾に促され、文雄は不格好ながらに泳ぎ始める。

「うんうん、よし、良い調子だな」

そんな二人を見ながら浩司はうんうんと頷いていた。

「……あたし、ボール戻してくる」

千絵はプールサイドに上がると、転がったままのボールを拾い、そのまま更衣室へと走って行った。

「あ、千絵、待って……」

追いかけてようとしたところで腕を掴まれる。

「さーて、そんなじゃ優奈ちゃんも練習しよっか？」

「え、あたしは別に……いいから」

「そんなこと言わないでよ。仲良くしようよ。俺達友達じゃん？　違う？」

腕を取られて強い口調で言われると拒みづらい。

「まあ、優奈ちゃんがそうやって練習さぼるんなら、俺はやる気のあるイインチヨの指導の方を手伝おうかなあ」

大吾に無理やり指導されている文雄は息を着く暇も与えられずにぐいぐい引っ張られて遠ざかっていく。

「っていうかさ、夏休み終わったら水泳大会あんじゃん？ 俺ら合唱の時全然協力できなかったし、今度は俺らの番じゃん？ それとも優奈ちゃん、俺らには厳しくしといて、自分達はだめなわけ？ それって変だよねえ？」

「それは、だって……」

「優奈ちゃんたちが言うから俺らだっていやいや苦手な練習付き合ったのにさ、いざ自分達が嫌なことからは逃げるわけ？ それっておかしくね？ ずるくね？」

「合唱コンクールはコンサートホールでやるんだし……」

「関係ねーよ。大会は大会じゃん。あ、もしかして水泳はどうでもいいってこと？」

「そんなつもりじゃ……」

何をいっても言い訳にしかならず、告げたところで浩司に引くつもりもない。

その一方で、合唱コンクールの練習を強いた気持ちもある。その内的な矛盾を思うと一方的に拒む理由が見つからない。

「う、うん。それじゃあ、ちょっとだけ……」

「よっしゃー、そうこなくっちゃ！ 俺、頑張って教えちゃうからね」

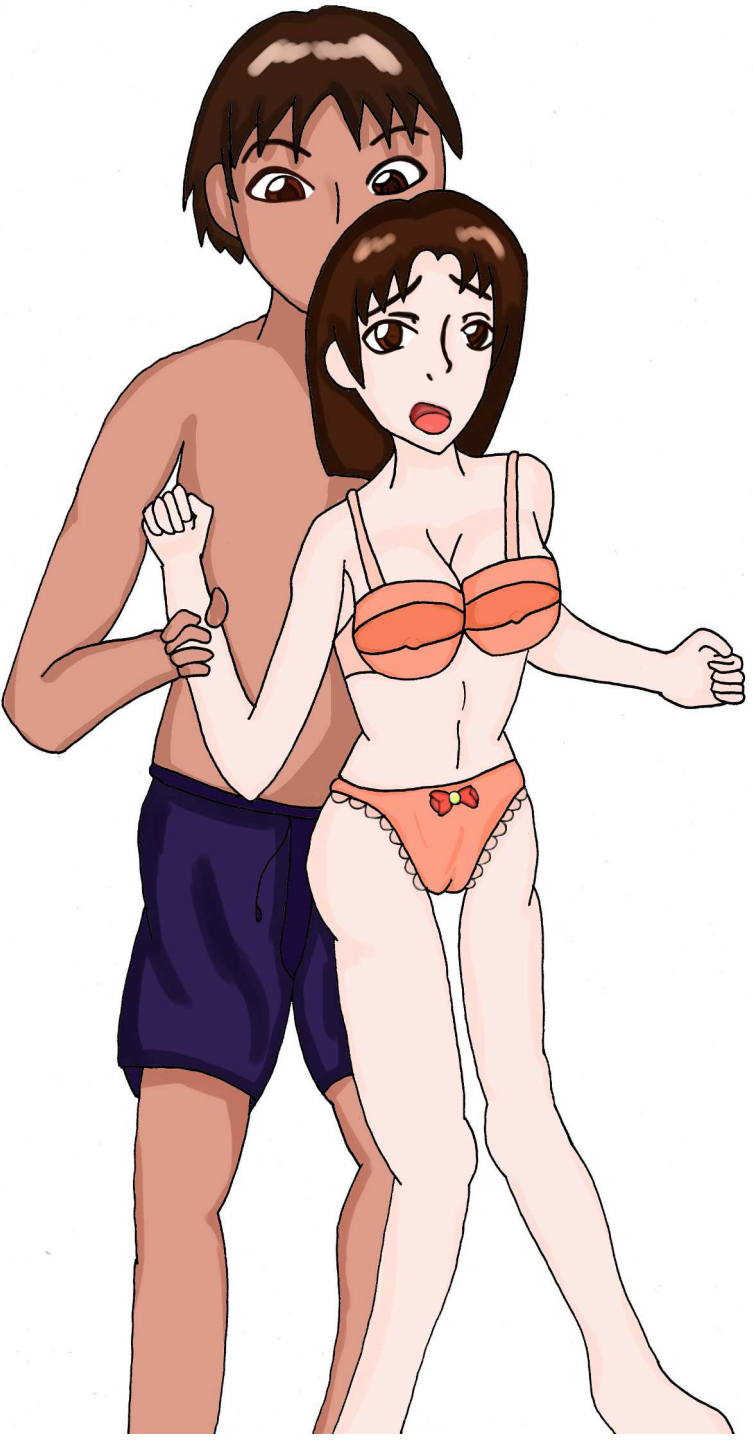
「お手柔らかに……」

「よっしゃ、じゃこっちこっち」

「うん」

浩司は促すように背中に回す……が、

「ひゃん！」



「うお？　どうかしたん？　ねえ、優奈ちゃん」
「えと、その……なんでもない」
背中に回った手はそのまま前の方へと回り込み、胸に触れていた……。

＊＊

「違う違う、そうじゃねーよ。ほら、もうちょっと腕を鋭くな……。よし、そうだ。それでいいぞ」
練習レーンで指導していた和正は、芳雄の上達ぶりにうんうんと頷いていた。

「ふはあ……はあ、あーつかれた……。っていうか、どうよ、俺の泳ぎ」

「だいぶ良くなった。次はバタフライ……あれ？　なんだ？」

練習レーンのほうで時折起こる水しぶき。何度目かを数えたところで和正も不穩に気付き、水中眼鏡を拭う。

「ん？　どったの？　あらら、あっちに酷いカナヅチが居るみたいだな」

芳雄は他人事だと噴き出していたが、その近くに居た茶色に髪を染めた短髪の男を見て眉を顰める。

「あれって笹井じゃね？　なにやってんだ？」

「笹井？　ん……」

大吾の近くで顔を出す色白の男子。先ほど見たばかりのもやしのがり勉だった。

「なんであいつら一緒にいるんだ？　市川さんはどこ行ったんだ？」

「……変だな……」

和正は優奈のことも気になるが、その二方で顔を出すたびにプールに押しやられる文雄に、少々度が過ぎていると感じた。

「お、おい、和正、どうする気だよ。ほっとけって」

「あんなことしたら溺れるっての……」

和正は水中に潜ると、すーっと練習レーンの方へと潜った……。

「へへ、おらおら、このままじゃおぼれるぞー」

「ぶはっ、ぶくぶく……」

空気を求めて水面に浮かび出ようとする文雄だが、大吾がその頭を押え込む。水しぶきがそこかしこに飛び散り、他の利用者は遠巻きにしていた。

「何やってんだよ、お前！」

大吾の後ろに潜水で忍び寄った和正は逆手に腕を捻り上げる。

「いてて、なにするんだ！　誰だてめえ！」

「聞いているのは俺だ。何やってんだ！」

和正は声を荒げて大吾の耳元で怒鳴る。

「ぎ！　う、うるせえな……。なんだ、田所か。なんの用だよ……」

「ぶわあ！　はあはあ、げほげほ……。げほ！」

同時に水面から顔を出す文雄。彼は真っ赤な目をしながら、ぶるぶると頭を振って咳き込んでいた。

「和正君！」

呼ばれて振り向くと優奈がのろのろとやって来る。その背後では浩司がつまらなそうに睨んでいた。

「ゆ……市川さん、騒いでたから来たけど、笹井、さっきから筒井に何してた？」

いつもの癖を無理やり飲み込み、優奈を後ろに庇うように立つ。和正は大吾を睨み、さらに続ける。

「お前じゃ教えられるほどうまくないだろうが」

「いいだろ、別に……」

「それに、さっきからお前がやったのって水面上がろうとする筒井の頭、おさえてただけじゃないか。溺れさせるつもりか？」

「おぼれって、そんな、そこまでするつもりなんかねーよ。ただ、委員長が水を怖がるから、スパルタ教育で克服させようなんだ……」

「本気で言ってるのか？ 言っとくけどな、人間って洗面器程度の水でも溺れるんだぞ？」

「脅かすなよ、そんなこといったって騙されないから……」

「嘘だと思えばそれでもいい。だが、なんで毎年浅い川や沼なんかで人が溺れると思う？ 人間はここにコップ一杯の水が入ると溺れるんだよ」

和正はアゴの裏の辺りを指差して真剣な顔つきで言う。

「溺れた人間はパニックになって空気を吸おうとする。そうすると一気に肺に水をすいこんじまう。どうなると思う？ 肺が水浸しになったら……」

低い声で睨み付ける和正に大吾は徐々に引け目を見せ始める。

「肺ってのは空気を取り入れる部分だよな？ それが水浸しになって、それでも空気が取れると思うか？ そうなったら、陸に上げても遅いんだよ。窒息死だ」

「ま、まさか……」

「そうなってからじゃ遅いんだぞ？ それでもお前、さっきのようなこと続けるのか？」

圧され気味の大吾の雰囲気を感じ取って和正は一気にまくしたてる。

水泳の授業でも体育の教員に何度も聞かされた。大吾も安易に無視できない。もともと彼は大柄なわりに気が弱く、浩司が居なければ独活の太木。自分の行った行為が場合によっては文雄を殺しかねない行為だと思い始めると、口数も少なくなる。

「俺はただ、その……」

「とにかく、お前の適当な考えで指導すんのはやめろよ。このことは職員さんにれんら……」

「……げほ、げほ……さ、つき……からげほ……聞いてれば……はあ、勝手なこと……言って……ぐえほ！」
ようやく一息ついた文雄がのそのそやって来る。

「おい、田所、なんのつもりだよ。僕は今、笹井君に水泳を教えてもらっていたんだ。邪魔をするなよ」

「……………は？」

まだしゃっくりをする文雄はどこどころ咳き込むけれど、和正を睨みながら言う。

「文雄君、和正君は文雄君のことを心配して……。それに、練習には見えなかったし……」

「優奈さん、笹井君は厳しいけど僕に練習を付けてくれていた。それなのに田所は邪魔したんじゃないか」

「文雄君……」

文雄の言葉に優奈は困惑を隠せない。明らかにイジメレベルの行為だというのに、どうして庇ってくれた和正を批判するのか？

「お、おう、そうだよ。俺はただ、委員長の水泳の練習に付き合っていただけで……」

「何言ってるんだ？ 筒井、お前自分が何を……」

「話にならないな。僕は練習をしたいんだ。邪魔をしないでくれたまえ。さ、優奈さん、君も練習を再開したほうがいいよ」

「え、でも……」

「合唱コンクールでは僕らが指導したんだ。今度は彼らが僕らの指導する。それでお相手じゃないか」
「だってよー、優奈ちゃん！ ほらほら、俺らもさっさと練習しようよー」

「おい、待て。なんでお前が教える必要があるんだ。ふざけてるんじゃないぞ」

「は？ なにお前？ たかが水泳部だからって粹がってんじゃねーぞ？」

「お前からこそバスケ部だろ。教えるんならバスケだけにしとけよ」

「なに！」

プールで睨み合う二人に監視員がちらりと見る。

「二人とも、落ち着いてよ。ね？ ね？ それに……」

「ふーん、そういう態度なわけ」

喧嘩腰の和正を見て浩司は妙に軽い態度で薄ら笑いを浮かべる。

「お前さ、今度問題起こしたら停学なんだろう？ いいのか？ 俺はいいぞ？ 喧嘩買ってやる」

「！ 停学って……それ、ホント？」

「補習の時、杉田が言ってたもんな？ どうだ？ やるか？」

「ああ、やってやるよ。お前がおかしなことしないようにきっちりしめてやる」

てっきり引くと思っていた浩司は一瞬眉を顰める。だが、それもすぐに杞憂に終わる。二人の間に優奈が割って入ったから。

「ダメだよ！ そんなの！」

「市川さん」

「停学なんて……そんなのダメだよ。ね？ 落ち着いてよ。ほら、田所君も大崎君も……」

「おい、和正、市川さんの言うとおりだぞ。それに、停学になったらやばいじゃん。秋前に水泳部で大会あるんだろ？」

一触即発な情況に芳雄も心配そうに和正に伺う。

「……」

「そうやってなんでもかんでも暴力に訴えるところが君のダメなところなんだ。さあ皆、こんな奴は相手にしないで練習しようじゃないか」

「ああ、そうだな。じゃあ、委員長が言うんだし、ほら、俺らも練習しようよ。そうしたら俺も喧嘩なんてしないしさ」

「……………うん」

「おい、筒井、お前、なにを言ってるのかわかってるのか？」

「……………うるさい、君なんかどこへでも行け。邪魔をしないでくれ」

文雄は紫の唇を震わせながら、和正に背を向けた。

「おい、筒井……っ！ 市川さん！」

「はーい、優奈ちゃんは俺らと一緒に練習再開しよーねー」

困惑する和正に好都合と感じた浩司が割って入る。彼は優奈をプールサイドへ促す。

「待て！ おい……っ！」

和正が声を掛けようとした時、肩口をドンと突き飛ばされた。

「話聞いてなかったのか？ 俺らは委員長の練習に付き合ってただけだし！ 何が人殺しだよ、溺れるだよ、バカじゃねーの？ このチビ、ふかしてんじゃねーぞ」

「お前なあ、ふざけたこと言ってんじゃ……」

「すいませーん、この人が変なこと言って絡んでくるんですけどー！ 監視員さーん！」

文雄の思わぬフォローを受けた大吾は調子に乗って話を広げていく。この場合、不利なのはどちらか？ 仮にどうなったとしても、校外で問題を起こしたとレッテルが張られる。そうなれば和正はさらに立場が悪くなる。先ほどは熱くなっただけで、プール故に頭が冷えるのも早い。

「おい和正。行こうぜ」

状況を察した芳雄は熱くなる和正の腕を引っ張っていく。監視員は何かあったのだろうかときよろきよろしいたが、和正達が離れたので別の方に視線を移していた……。

++

温水プールは離れた場所にある。

温度が逃げないようにドアで仕切られているため、中の様子はプール側から見えない。

暑さ故にぬるま湯のプールは人気がなく、練習にも適さない為、誰も利用していなかった。

そんな場所へやってくる男女。

男は女の子が逃げないようにとがっしり腕を取って促す一方、時折、手がお尻や横乳へと滑る。

その都度 「あの」「やめてね」「だめだよ」とやんわり断る女の子。

そして 「いいじゃん」「ごめんごめん」「触ってないし」と悪びれない男だった。

「……あの、わたし、やっぱりあっちのプールで……」

自分と浩司以外に誰も居ないことに不安を感じた優奈は引き返そうと踵を返す。しかし、浩司の腕を振りほどくことはできそうになく、ぐいっと引っ張られる。

すると、胸元が零れそうになり、慌てて水着を直そうと立ち止まり、結局逃げられなくなる。

「よいっしょ」

「え、きゃ！」

不意を突いてそのままプールに投げ入れられる優奈。大きく水しぶきを上げると、突然のことであたわたしてしまふ。

もがき手を伸ばし、しがみつこうとする優奈。足を突っ張ろうとしたけれど、急ぎ過ぎるせいで滑って踏ん張れない。

「あはは、優奈ちゃん、落ち着けて、ほら……つかまって……」

溺れる寸前な優奈はわらをもつかむ勢いで浩司にしがみつく。

「げほげほ……うう、げほ……はあはあ……」

咽てなんども咳き込む優奈。お湯のせいで目も痛くてうまく開けられない。何度か拭い、目を瞬かせてようやく視界がぼんやりしだす。

「お、積極的じゃーん」

「え……あ、ちょっと……」

優奈は慌てていたせいでいつの間にか浩司にしがみつく格好になっていたことに気付き、突き飛ばす感じで距離を取る。すると、はらりと何かが落ちた。

「え？ あ……」

オレンジの布に見覚えは薄い。けれど、胸元のだるんとした重みを感じた時、すぐに気付いた。

「やだ！」

ビキニのトップが落ちたことに気付き、優奈は慌てて手を伸ばす。けれど、浩司のほうが早かった。彼はビキニ

のトップを奪うと、そのまま頭にかぶる。

「ちょっと、大崎君、やめてよ！ 返してってば！」

「優奈ちゃんの水着もーらい！ かえさねーよ！」

おっぱいを手で隠しつつ、浩司の頭に片手を伸ばして懸命に取り返そうとする優奈。けれど、不自然な体勢のせいで足が滑り、浩司の方に倒れ込む。

「きゃっ！」

「お、大胆だねえ」

優奈から抱き着いてくる格好になり、浩司は楽しそうに彼女を受け止める。そして腕を取り、胸元を開かせる。

「あはあ、優奈ちゃん、おっぱいでっかいねえ……。ボリウムありまくりじゃん。それに色白だし、柔らかそう……」

「あん、ちょっと、やめて……大崎君、見ないで、それに水着、返してよ……」

「返して欲しい？」

「うん。それと、手、離して……」

「いいじゃん、減るもんじゃないんだし、見せてよ」

「だって、誰か来ちゃったら……」

「いいから見せろよ」

いつものふざけたものとは違う低く脅しの利いた声。優奈は怯えを隠せず、肩を竦めてしまう。

「触らせろよ。そうしたら返してやるからさ」

「……いやよ。そんなこと……」

「触らせろよ。別にいいんだぞ。俺はこのまま帰ってもよ」

「そんなの酷いよ……お願い、返して」

「触らせろ」

「お願いよ、大崎君……」

「触らせろ」

「…………」

「触らせろ」

没交渉な浩司に泣き落としは通用しない。彼は優奈の色白で大きなお椀型のおっぱいを瞬きを我慢してでも見つめていた。

「いいじゃん、少しぐらいさ……」

無言の優奈にしびれを切らした浩司はおもむろに手を伸ばし、むにゅっと掴んだ。

「んっ！ や……だめ、触っちゃ……やだ……」

浩司は遠慮なしに優奈のおっぱいを掴む。ぐにぐにと揉むように回すせいで違和感よりも痛みが強い。

「いた、痛いよ、やめ、離して……、おねがい、痛いの……」

強引に掴まれるだけで痛みしかない。優奈は涙をにじませながら浩司を押しつけようと腕を張る。しかし、非力な彼女では抵抗らしい抵抗もできず、ぐにぐにとおっぱいを蹂躪されていた。

「おねがい、やめて……痛いの、痛いよ……痛い……」

「ふーん、じゃあ優しく触ってって言えよ」

「……だって、痛！ うっ、やめ、おねがい、放して」

「言え」

「……んう……痛いの……おねがい……」

「言えって言ってんだろ、おら！」

柔らかいおっぱいを捻り上げる浩司。優奈はその痛みにも目を瞑り、堪えられずに叫ぶ。

「お願い！ 優しく触って！」

「よっしゃー！ やったね。優奈ちゃんが触ってっていったんだかんなく！ へへ、触って欲しいならそう言いなよ〜」

「あ、やだ……やめ……んっ……」

態度を一変させる浩司は、先ほどとは全く違うソフトな触り方を始める。

柔らかさと重さを確かめるように回すように、確かめるように軽く持ち上げる程度に弄る。

最初は横乳、下乳と中心から外を丹念に触り、それから円を描くようにして徐々に中心へ向かう。

「んっ、くすぐったいよ……んふう……！」

胸元をかすかに触られることでぞくぞくした感覚が優奈の背中に走る。

「んっ、んっふ……ふう、あ……ん」

上ずった声が口から洩れる。恥ずかしいから抑えたいのに、唇をきゅっと噛んでも隙間から漏れる。

「お、優奈ちゃん、ソプラノボイスってやつ、カワイイじゃん、カワイイじゃん！」

休み時間、教室の後ろで誰かをからかっている時のような煽る言い方の浩司。優奈は上目遣いに彼を睨むが、彼の指が乳首をそっと触った時、これまでより強い刺激が走った。

「ああ……ん……っ！」

思わず出た恥ずかしい声に優奈は慌てて口を押える。はっとして彼を見返すと、嫌らしく口元を上げて見下ろしていた。

「なにになに〜？ もしかして感じちゃったとか？」

「別に、そんなことないですし……わたしは、別に……」

嘘をついた。すぐばれるようなもの。

顔は真っ赤になっている。お湯にいるせいではなく、身体が熱くなる。

「ふーん、じゃあ、へーきなんだ〜？」

「……………そう、だよ」

強がる優奈だが、すぐに後悔する。

「あ、んっ、くう……ふうん……んっ、だめ……やあん、そんなとこ、触らないで……あ、やだ……」

「優奈ちゃんの乳首、丸くってぼちっとしてるね。おっぱいこんなやわけーのに、なんでちくびだけこんなしこってんの？ なんでなんぞ？」

いつもなら乳首も少し硬い程度のはずなのに、乳房に触られ、乳首を指先でつままれ、転がされている内に、どんどんかたく、尖っていくのがわかる。

「ちが、そんなこと、ないです……よ。ね、大崎君、も、もういいよね？ れ、練習しようよ。おねがい、あ、そうだ！ わたし、クロールとか、よくわかんないし……ね……」

強引に話を逸らそうとする優奈は無理と思いつつも必死にせがむ。

浩司は優奈の乳首をつまみながら、くいくいと上下させる。

「んっ、ふう……はあん！ ああん……んう……」

唇を噛んで必死に声をおさえる優奈を無言で見下ろす浩司。

おっぱいを弄られ、お湯の温かさと身体の熱さでだんだんとぼーっとなる優奈。下腹部から沸き起こるぼんやりとした感覚に徐々に気持ちと視界がぶれていく。

「あ……んっ、んっ……はあ……はあ……」

しゃっくりのような声を漏らす優奈は抵抗らしい抵抗ができず、押し返そうとしていた手が逆にすがるような形で彼に体重を掛けていた。

「練習ねえ、ようやくやる気でした？ んじゃ、さっそくしてみよっか！」
相変わらず作ったテンションの浩司は意外にも優奈から離れた。

「あの、水着……返して……」

ほっとしつつ、まだおっぱいを丸出しなことに気付いた優奈はおそろおそろ尋ねてみる。彼が本当に水泳の練習をするつもりであれば、水着を返してくれるかもしれない……。

「まずは水着外して練習してみよっか。ね？ ほら、筋肉の動きとか見る為に水着あつと邪魔じゃーん？」

謎の指導方法を提案する浩司は水着を頭にかぶったまま。それどころかきゅっと絞めてもともとそういう帽子のように見立てる。

「そんな……だって、返してよ……」

「練習が先、優奈ちゃんがちゃんと練習したら返してやるよ。ほら、まずはクロールしてごらんって」

「……うう」

力では適わず、大声を出す勇氣も無い。優奈は言われるままにクロールをして見せる。

だが、そこが比較的浅く、温水が相手では上手く顔を付けられず、思うように動けない。

「あーあー、全然だめだねえ、優奈ちゃん……」

「きやつ！」

浩司はろくに観察するわけでもなく、半裸の優奈を掴むと、おっぱいとお尻に手をかける。

「ちよ、やだ、変なところ……さわっちゃやだ……」

「ん？ 優奈ちゃん、変なところってどこさ？ 優奈ちゃんの変なところは……」

にやにやしながらおっぱいを驚掴みにする浩司。

ぎゅっと掴まれ、最初の時のような痛みを覚悟する優奈。

「んっ！ ……んっ……はあ……あれえ……え、どうして……」

おっぱいを強く掴まれているのはわかる。彼の指が柔らかなおっぱいに食い込んでいるのだ。けれど、そこで沸き起こるのは痛みではない。むしろむしろする気持ちと、下腹部の重さだった。

「どこが変なのかな？ 優奈ちゃん」

「んっ……えと、んと……ふわあ……はあん……」

恥かしさと答えられない質問に優奈はまごつくだけ。もやもやる気持ちがだんだんとお腹から上へと昇って来て、カクンと軽く前に倒れそうになる。

「おわっと、危ないって……どしたん、急に」

不意に足を滑らせる優奈に浩司は慌てて抱き留める。

背後からぎゅっと抱きしめられた優奈のお尻には、ぼことなった部分がお湯より少し高い温度を伝えて来る。

「え、え……！！？」

それがぐいっとお尻に押し付けられ、おっぱいを両手でぐいぐい揉みしだかれる。

「あ……んっ……んうふう……はあはあ……んっ……やあん……やだ、おねがい、さわっちゃやだ、放して……お願い、なんか、変なの……」

「どう変なんだよ……ん？」

耳元で囁く浩司。先ほどまでのような力づくの脅しではなく、低いながらも甘い雰囲気醸そうとしたモノ。

「ん……えと、だから……やだ、お、お」

「お？」

「お……っばい……さわっちゃやだ……おねがい、放して」

「やだ」

「おねがいっ！ んっ！ はあん……おねがい、今なら誰にも言わないから……」

「しんじらないしく」

おっぱいを両手で掴み、くいくいと円を描くように揉み始める浩司。

おっぱいの付け根の辺りをぐいぐい回されると痛みもあるのだけれど、ぼんやりさせられる浮ついた感情が芽生えてくる。時折乳首を弄られてぴりっとした痛痒い感じに視界が戻り、おっぱいを回す感じに揉まれてまたぼやける。

「はあ……んっう……はあ……はあ……なにこれえ……なんでえ……」

「優奈ちゃん、オナニーしてないの？」

「おな……おな……なんてしてないよ……知らないもん」

「へえ……こんなおっぱいなの？ おつきくてだらしなない感じじゃん？ 自分で触って大きくしたんじゃないの？」

おっぱいが大きくなり始めたのは去年の冬頃から。特に意識して触ったわけもなく、うつぶせに寝ることができなくて不便だった。それと、男の人の視線がいやらしくなった気もした。

「触ってないし……」

「へえ、天然巨乳ちゃんなんだ……ふーん」

「きよにゅ……そういう言い方しないで……はずかしいよ」

「いいじゃん、実際でかいんだしさ……うわあ、牛みてーなおっぱいだねえ……」

「んっ、あ……んっ！」

「つかさ、優奈ちゃん、さっきから感じ過ぎじゃね？ さっきなんかくっつてなったのだってさ、イッタンでしよ？」

「……んえ、え？ いった？ なにそれ？」

先ほどカクンとなった身体の不調は確かに不思議だった。

ふわっと身体が浮くような感覚になるのに、急に体が重くなって、立とうとしたのに足が滑って前のめり……。

その間、息をするのものはばかられるぐらい苦しくなり、お尻のあたりからきゅーっと我慢を強要され、その後ばあっと開放感がひろがった。

そしてとても気持ちよかった。

前にも一度、そんなことがあった気がする。

「きもちよかったんしょ？」

「ん……えと……あの」

「ああ、やっぱそうだ。優奈ちゃん、おっぱい揉まれただけでいっちゃったんだわ」

「いく？ なの？」

「そうそう。優奈ちゃんさ、勉強ばっかしてっからエッチのほう全然だめなんだね。落第だー」

「らくだいいって……そんな、エッチなことなんて」

できなくても良いと言いつ返したい。けれど、それよりも先にまたおっぱいを揉まれた。

「んやあ！ ああん！」

今度は責めるようにぐいぐいと力強く乱暴にしてくる。

痛みが強いのに、ぐにぐに回されるとどんどん気持ちよくなってしまふ。

「やあん、だめえ……おっぱい揉まないでエ」

「くくく……」

やめてと言うわりに碌な抵抗をしない優奈。浩司はにやにや笑いながら、ボトムに手をかける。そして、ぐいっとおろした。

「え……あ、やだぁ……やぁ!!」

ビキニのボトムを下げられたことに気付いた優奈は、ばしょんとしぶきを上げてしゃがみ込む。

「はは、どうしたんだよ、優奈ちゃん？ ん？」

「だって、あたし、裸なんて……」

ボトムを戻そうとするけれど、脇から腕を伸ばされて、そのまま強引に脱がされる。まんま素っ裸にさせられた優奈は、泣きそうになりながらお湯の中にしゃがみ込み、身体を隠す。

「……どうかしましたか？」

するとドアの向こうから所員の声がする。

「はーい、なんですか？」

「なんかさっきから大声を出しているようですけど……」

ドアががらりと開いて、衝立の向こうから足音がする。こちらに向かってきているのだ。

「やば、どうすん？ 優奈ちゃん。俺はこのままでもいいよ」

「だ、だって、どうすればって……」

「いい方法があるよ？ 優奈ちゃん、これ巻きなって……」

浩司が赤くて大きな布を取り出すので、優奈はそれを胸元を隠す。

「そんでき、こっちきて、座んのさ……」

「え……あ……」

「早く早く！」

赤い布が何かわかった時、優奈はそのまま浩司の股間の上にお尻をあてがう恰好にさせられた。

「あ、なんすか？ どうかしました？」

様子を見に来た職員に浩司は顔だけ向けて軽い返事をした。

「騒いでいたようなので、何かあったのかなと思ひまして……」

「はい、今、僕たち二人で特訓してます。みんなに見られたくないから、こっちで練習したいんです。だめですか？」

「いえ、利用届けさえ出していれば問題ないですけど、あまりうるさいようだと使用禁止にしなければなりませんので注意してください」

「はーい」

「……んっ……は……いい……」

浩司に背後から抱えられる恰好の優奈は肩を震わせていた。

赤い水着を着て水中でピシッと脇を絞める恰好は不思議だが、それだけ真剣に練習に取り組もうとしているのだろうと職員は納得し、踵を返した。

「んっ……あ……だめ……」

かすかに聞こえる声は浩司が立てた水しぶきの音でかき消されていた。

赤い布は浩司の水着。パンティは近くに浮いており、手を伸ばすも逆に遠のいていく。

「あ、だめ……んっ……やだ……んっ……」

おっぱいこそ隠しているけれど、下半身は丸出し。

職員から見えないように浩司がお尻を密着させて隠しており、怪しまれているが気付かれてはいない。

「……あ……んっ……」

股座に感じる固くて熱い感触。お湯にも負けないぐらいの温度を内腿に伝えて来る。

それが男性器であることぐらい、オナニーを知らない優奈でも理解できた。

セックスがどういう行為か？ それは男女別に行われた保健の授業で学んでいる。だが、勃起したオチンチンを

股座で挟む経験など疎く、それが女の子の大切な部分に迫っていることの怖さに震えてしまう。

必死で拒もうとつま先立ちになる優奈だが、浩司がお尻を掠るように撫でる度にぞくぞくとした快感が沸き起こり、足がぐらぐらとしてしまう。

そうすると股の割れ目が浩司のおちんちんとちゅっとしてしまう。

「ひゃあうん！」

彼の熱いオチンチンに触れると、変な声が出て、肩がぴくんと震えてしまう。

さっきおっぱいを揉まれたり、乳首を擦られるよりずっと嫌なのに、それでもじんとした感じがしてしまう。

「むぐ」

同時に口を手で押えられる。その指が口の中に入り、舌を撫でてくる。

他人の指を舐めるなんて汚い感じがして嫌。それを察してか、浩司は内側を探るように、舌の表面にぐいぐいと

押し付けてくる。

「んむむう……」

くぐもった声で呻きつつ、ねばっこい唾液が口腔内に溢れるのを感じる。

「はい、すみませんでした」

遠ざかる足音を聞いて少し安堵する。ばれなかっただけでも十分だろうか。それよりも早くこの行為を終わらせて帰りたい。そう思った。

「んちゅ……はあ……ちゅ……ね、また来られたら困るし、もう戻ろうよ……」

指を吐きだすと、つーっと唾液の糸が伸びる。いつもならこんなに伸びないはずなのにと、ぼうつとした視界で途切れるのを見ていた。

「えー？ やだよー、だって、俺、勃起しちゃってるし……」

「ぼ……ぼっきって……やだ……」

「ホントだって、優奈ちゃんがあんまりにえろえろ過ぎて、俺のチンポがギンギンになっちゃったんだって、ほら」

「え？ あ、……あ！ やだ！ やめ……」

浩司は優奈の手を引っ張ると、股座へともっていく。そして勃起したチンポを握らせた。

「どう？ 俺の結構でかいっしょ？ してみたくなんね？」

「やだ！ やだやだ！ やめてよ、大崎君、冗談だよね……ね？」

親指よりも太い浩司のオチンチン。直に触らせられ、どくんどくと脈打つ力みを教えられる。

保健の授業で見たイラストでは可愛らしいペンのようなものでしかなかったのに、実際にはごぼうどころかにんじんといえるぐらいの太さ。それを自分の頼りない縦筋で受け入れるなど、経験の無い優奈には考えられなかった。

「なに？ まさか優奈ちゃん、処女なん？」

「……」

「なあ、処女なん？　ねえねえ……」

ぐいぐいとオチンチンをお尻に押し付けてくる浩司。優奈は恥かしさと怖さで涙をこぼしそうになっていた。

「やめ、おねがい、やめて……」

「止めて欲しかったら教えろよ、処女なのか？」

「やめて……おねがいよお……」

「いわねーんだな？　んじゃ入れて試してみっか。血が出たら処女なま、入れたら処女じゃなくなんだけどな」

「え……」

浩司は優奈の腰に腕を回すと、勃起したチンポを掴み、優奈の割れ目にあてがう。

「や、やめ！　それはやめてよ！　おねがい！」

「だって、優奈ちゃん処女かどうか教えてくんねーじゃん」

「いいます、いいます！　だから、おねがい、それはおねがい……やめて」

「んじゃ、早く言えよ」

「……しよ……処女です……」

言葉にするとかっと顔が赤くなる。同時に恥かしさ、悔しさが訪れる。知られたくない秘密なのに、こんな形で嘲られて馬鹿にされて……。

「へー、そうなんだ、優奈ちゃん、処女かー、エッチしたことないんだ……。だっせー！　ぎやはは、だっせーな、まだエッチしたことないんだ！　チョー受けるんだけど、まじかー、勉強ばっかやってセックスしたことないんだー、あっぱはっは！」

さも愉快そうに笑う浩司に優奈は涙を堪えられなかった。

「すん、すん……ひっぐ、ひっぐ、なんで、そんなこと……言うの？　だって、あたし、好きな人……」

好きな人……。

言いかけて止まる。

居るのだろうか？

居ただろうけれど……。

「ふーん、まあ、あんなだっせーモヤシかチビじゃね。それに筒井ってたしか、真正だったっけ、あいつ」

「しん……？」

「皮が剥けないだっせーチンポって意味だよ」

「……………そんな、言い方って……」

「しゃーねーじゃん、本当のことだし。だっせーよな。真正ホーケーなんてさ！」

「だ、誰だってそういう欠点ぐらい……」

真正包茎が何を意味するのか分からないが、処女を論われたことと重ねて反論していた。

「だってホントだぜ？　アイツ、着替えの時なんかこそしてんなーって思ったんだけどさ、思い切りタオルとってやったら、皮でチンコ見えねーの。しかもちっさいし……。あんどきはすっぱー嗤ったわ。まじ、見てもらんよ。筒井のチンポ。優奈ちゃん、仲いいんでしょ？　あ、でもアイツのチンポはフェラしない方が良いよ。病気になるって」

「ふえ……？　とにかく、文雄君の事、悪く言わないで上げてよ……」

「なんで？　いいじゃん。別に。真正包茎が悪いんだし」

「よくわかんないけど、酷い事言うのは……」

「ふーん、じゃあさ、優奈ちゃんが俺のチンポフェラしてくれたら止めてやる」

「え……」

「してくれないなら、俺、後期の水泳の授業であいつのズボンおろして包茎だってことみんなに見せてやるわ。そしたら笑えるだろうな。ぜったいうけっしょ？ ああそう、絶対笑えるよ、これ。よし、やろう！」

「そんな！ そんなことしちや……」

「ああ、ついでに優奈ちゃんが処女だってことも皆にばらしてやる。ダッセー蜘蛛の巣マンコの処女優奈と真正包茎イインチョ。恥垢溜まりまくりの委員長同士、ある意味お似合いじゃね？」

「な……そんな……」

さらに飛び火したことで優奈はわけがわからなくなる。真っ赤になって目をぐるぐる回し、浩司を見ようにも、彼の勃起したチンポがぴこんぴこんと上下するのを直視できない。

「ね、どうすんの？ フェラする？ それとも真正包茎、処女だってこと皆にばらされたい？ 早く決めろって」

「……」

またも脅しを含んだ低い声になる。すっかり萎縮してしまった優奈は身体を抱きしめるようにして俯いてしまう。「なあ、優奈ちゃん、そんな怖がなくていいじゃん。ちよっとフェラするだけだよ？ 別に痛いことするわけじゃないしさ、ちよっと我慢すればいいだけだよ？」

浩司は軽く優奈の頭を撫でると、ひらっと布地を落す。

「ほら、水着も返すしさ、あとは優奈ちゃんがちよっと我慢するだけ。それだけで優奈ちゃんが処女ってこともイインチョの真正包茎のことも秘密にしておいてやるからさ……」

「ほんと……？」

「ああ、ホントだって。ちゃんと水着も返したっしょ？ ねえ？」

「うん……」

手元に戻って来た水着を握りしめ、優奈は頷く。

「ほら、早く着たら？ また職員さん来たら困るっしょ？」

「……はい」

促され、優奈は水着を着こむ。たかが布一枚とはいえ、無いのとあるのでは全然違う。乳首や心細い縦筋を隠せただけでもここまで心強いのだと思い知った。

「ね？ 約束守るじゃん、俺」

「はい」

今度はしっかり返事ができた。浩司も怖い顔をしていない。あとはフェラをちよっと我慢すればいいだけ。少なくとも縦筋や乳首、おっぱいを隠してできる行為なのだから、そんな大変ではないはず。さっきはおチンチンを握らされたのだし、それ以上の行為などあるはずがない。

「じゃあ、次はフェラしよっか？ 優奈ちゃん」

「はい」

「よーし、イイコじゃん、さっすが優奈ちゃん」

「あ、でも、本当に約束、してくれるんですか？」

「うん、いいよ。フェラさえ……ああ、そうだなあ、じゃあ、ごっくんしてもらおっかな。そうしたら絶対誰にも言わない。筒井のズボン脱がせたりもしないよ。つか、男の皮被りチンコなんて見たって楽しくないし、約束するよ」

「そうですか。じゃあ、します」

「いいの？」

「はい」

「ごつくんも？」

「はい、我慢します」

「そう。それじゃあ……してよ……」

浩司はプールサイドに腰掛けると、一旦しまったはずのチンポを見せつける。

「え……？」

「だから、フェラすんでしょ？ ほら、こっち来て……」

促され、チンポを鼻先数センチのところまで引っ張られる。

「なんで、おちんちん……出してるの……？」

「だってフェラするんでしょ？」

「あの、大崎君、あたし、フェラってよくわからないんだけど……なにすることなの？」

「ん？ ああ、チンポ咥えることだよ」

「……くわ、おち……！ いや、いやだよ、そんなの！」

性器を口で咥える提案に優奈は口ごもり、顔を背けようとする。けれど、頭をおさえられ、強引に顔をチンポに近づけさせられる。

「い……や……んっ……」

頬にチンポが触れた。ぬとっとした感触。濡れている。プールに入っているのだから当然だけれど、それはつつと糸を引く。

「……なにこれ……」

性行為の知識は保健の授業で学んでいた。けれど、カウパー腺液やバルトリン腺液などの性行為に伴う汁や、その性質は知らない。

イカのような生臭い香りが鼻につく。

「ほらほら、咥えないと終わらないよ」

浩司は薄ら笑いを浮かべながら、優奈の顔にチンポをつける。

ちゅっ、ちゅっを音を立てて顔にべとべとした粘液がこびりつく。優奈はいやいやと顔を振るが、何度もチンポを突き立てられ、唇にも着いた。

「……ふーん、約束破るんだ……」

「だって、おちんちんなんて……やだよ」

「じゃあ、今日のこと、杉田にちくろうかな」

「……え？ 杉田先生……？ なにを……」

唐突な聡の名前に優奈は目をぱちくりさせる。このことを報告されたとして、優奈にデメリットは無いのだが……

「だから、田所の事だよ」

「田所君が……なにを？」

今一つ要領を得ない浩司に優奈は困惑を隠せない。和正は今日、偶然プールに居て、特訓と称するイジメ行為を注意してくれて、彼女を助けようとしてくれた……

「市民プールで喧嘩してましたって言ったら、アイツ今度は停学だよ？」

「てい……がく？」

「そうだよ。停学。杉田にこの前補習の時言われてたの聞いたし。あいつさ、こんどなんか騒ぎ起こしたら停学、下手したら退学かもね……」

「そんな、退学なんて……嘘……」

「俺がチクったらどうなっかな？　アイツ、かなりセンコーの心象悪いし、さっき職員さん来てたから、多分なあ……」

含みを持たせつつ黙り込む浩司。

これまでのことを考えると和正の立場は確かに悪い。最近はいろいろすれ違いがあったけれど、彼が自立してくれることは今も望んでいる。それなのに停学・退学になったら……？

しかも、その原因は、文雄が虐められているのを見ての義憤。優奈のひいき目を覗いても彼がしたことは正しい行為。けれど、優奈が庇おうとしたところで、法子や聡が聞き入れてくれるだろうか？　合唱コンクールの時も、ビーカーの破損事故の時も二人は……。

「それは、やめて……ほしいの……お願い」

導きだされた答えは、浩司に密告を止めるよう頼むこと。それはつまり……。

「ふーん、じゃあさ、いいよね？」

にやにや笑いながら、浩司はプールサイドに座り直す。

「そんなこと……できるわけ……」

ぴこんと上下に揺れるチンポ、先っぽから粘液がだらりといやらしく垂れ、つんとした臭いが漂う。

汚らしく禍々しい形状の男性器を前に優奈は顔を背け、目を瞑る。

——助けて、誰か！

先ほど、困っていた自分を見かねてやってきてくれた和正を思い出す。彼はいつだって彼女の味方……。困った時はいつでも……。

父は朝が早いからおはようとあいさつした記憶が無い。

日曜日は昼まで寝ているから、こんにちはから始まる。

誰も居ない園に連れていかれて、誰も居ないお遊戯室で絵本を読む。

バスが来て皆が来るまで一人きり。おかげでいつもお気に入りのおもちゃを手にしたけど、そのせいで皆と喧嘩した。

だから結局独りぼっち。

最初はそれが嫌で、幼稚園行きたくないとダダをこねた。

でも、それだけ。

母は自分を送ると農協へ行き、迎えに来てもやっぱりすぐ農協へ戻る。

おばあちゃんは寝てばかりで全然遊んでくれない。だからつまらない。

でも見つけた。他にも居た、ひとりぼっちの子。

喧嘩っ早いからみんなと仲良くできないみたい。

あたしもその子のこと怖かったし。

あたしがいつものようにお気に入りのおもちゃを抱えていると、他の子が言うんだ。

——いつもゆうなちゃんばかりずるーい！ かして！

——これはゆうなのだもん！ さきにきたんだもん。

——いいからかすの！ ひとりじめはだめなんだよ！

——あ……、う、う、うえーん！ うえーん！

——ふんだ、わるいのはゆうなちゃんだもん！

突き飛ばされて泣いちゃったあたし。

みんなはあたしがいつも独り占めしてるの知ってたから、だから庇ってくれない。

——おい、なに泣かしてるんだよ。

——しらないわ。ゆうなちゃんがわるいんだもん。

——なにいつてんだ。おまえがつきとばしたんだろ、あやまれよ。

——ちがうもん、ゆうなちゃんがいつもひとりじめしてたんだもん！

——だからってつきとばしちゃだめだろ。ひとりじめはこいつがわるいけど、つきとばしたことはおまえがわるいだろ。

——うるさいなー、あっちいけ！

その子、せっかく手に入れたおもちゃ、なげちゃった。でも、独りぼっちの子はすばしっこい。だから、躲して、他の子に……。

——いたいなあ。なにするんだよ！

——あたしじゃないもん、わるいのはさけたこいつだもん！

——投げたのはお前だろ！

——ちがうもんちがうもん！ ひっぐ、ひっぐ！ うえーん！！

——あらあら、大変、どうしたの千絵ちゃん？ なにがあったの？

——うえーん、うえーん、かずまさんが、かずまさんがわるいんだもん。

——まあ、またかずまさん？ どうしてそんなに喧嘩ばかりするの？ それに千絵ちゃんは女の子だよ？ どうして女の子酷い事するの？

——あー、またかずまさんが女の子いじめてるー。

——さいてー、さいてー！ ゆうなちゃんのことみなしたんだー！

あの頃から誤解されやすいんだ。うふふ、おかしいの。

——ごめん。おれ、かっとなって……。

先生に引き連れられてやってくる和正君。目は赤かったけれど、泣いてなかった。昔から負けん気だけは一人前

……、んーん、他も立派だったもん。知ってる。知ってた。

——んーん。いいの。

——ゆるしてくれる？

——えと、それじゃあ、おともだちになって！ そしたらゆるしてあげる。

——え、おんなともだちなんかなやだよ。

——……なってくれないの？

あたしが泣きそうになると慌ててた。これって脅迫かな？

——わかったよ。特別だぞ。

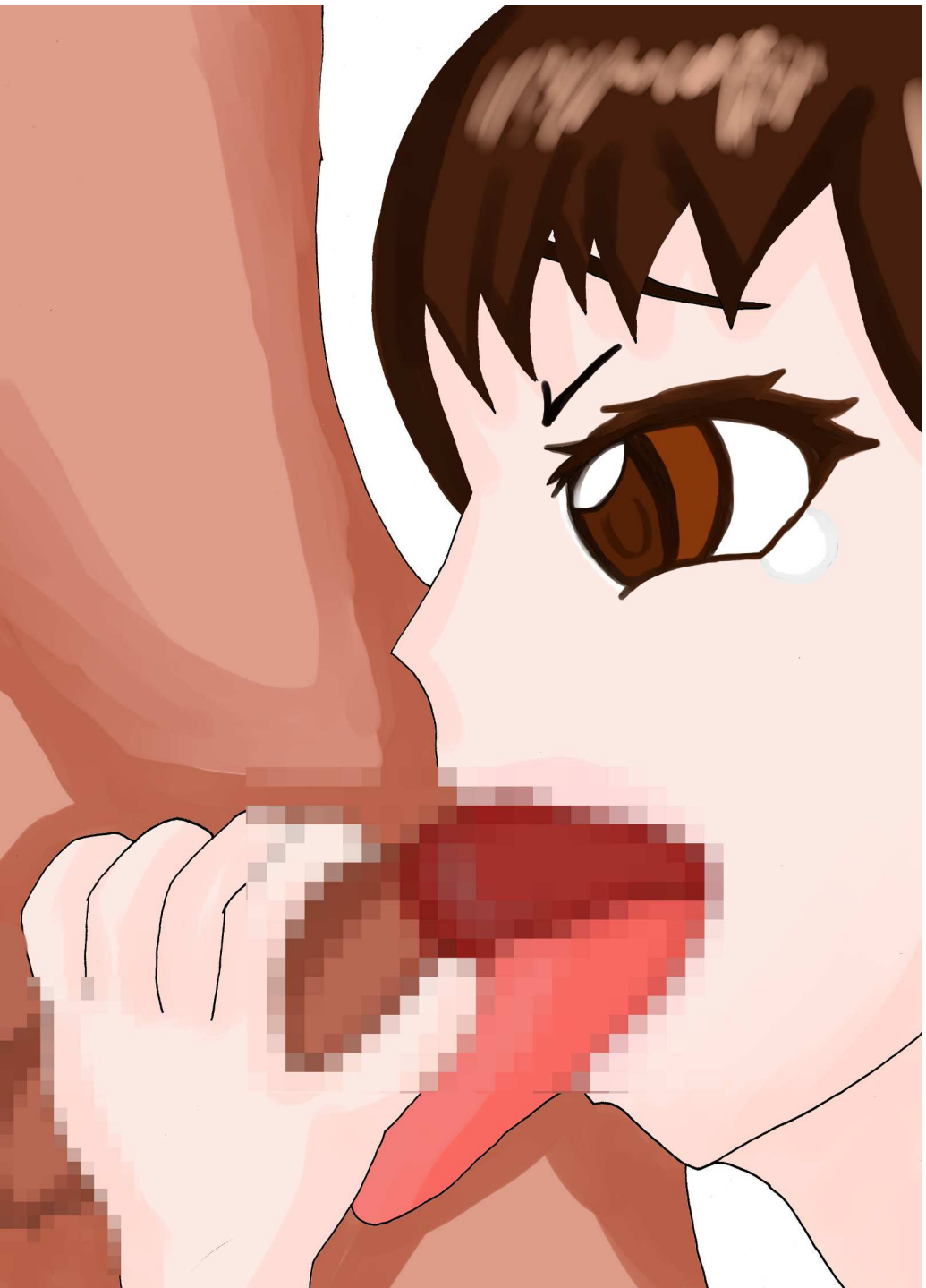
——うん！

そのあとは手を繋いで……ほしかったんだけど、いつも和正君、先に行っちゃうの。照れ隠しなのはわかるけど、ちよっと寂しかった。

でも、それでも、家に帰ってからでも遊びに来てくれる。

家が近いからって言ってたけど、本当は通りを挟んで向こう側。あの頃のあたし達には冒険に感じるくらい遠かった。

和正君はそんな苦難を乗り越えて、昼下がりに尋ねてきてくれた。だからあたしは寂しくなかったの。和正君のおかげで……。



「んっ……んっ、んうふう……はぁ……はぁ……んちゅ、けほ、けほ……」

「ほら、口止まってんじやん。それじゃ俺、イケないって」

「んぐ……んぐ……ちゅむ、んぐこく……」

プールサイドに座り、股を開く浩司。その股間に顔近づけ上下させる。

ぴちやぴちやと水の弾ける音がして、ごく、ごくっとな喉がなる。時折咳き込む音がまじり、彼女の後頭部を浩司は乱暴に掴んでいた。

「んぐう……んっ……んちゅ……」

口腔内で受け止める浩司のチンポ。生臭く、しょっぱく、塩素で少し苦い。

ちんぽの先っぽからどろっとしたものがぴゅっと吐きだされる。何度目かごくっとな飲み下してしまった。

「うええ、ぺっぺ……」

たまらず口を離し、唾を吐く。けれど、既に喉を下った浩司の粘液は吐きだせない。今すぐにでもうがいをした
り、何か綺麗な水を飲みたかったけれど、頭をおさえられ、再びチンポを咥えさせられる。

「んちゅ……んう……むむう……んちゅ……」

男の人の勃起したチンポを口に含む。口の中で暴れ、どろっとした粘液を垂れ流す。

最初、自分の唾液が膜のようになっていてから平気なつもりだったけれど、粘液が溢れるにつれて嚥下せざるを
えず、徐々に口腔内の浩司と自分の比率が塗り替えられていく。

「んふう……んちゅ……」

「なんだよ、全然気持ちよくなんねえよ……。優奈ちゃん、可愛いけどフェラ下手だな……。これじゃあ他の奴ら来ちゃうぜ？」

「んうー！ んちゅ……ちゅ……」

きこなく舌先でチンポを舐める。すごく嫌だけど、そうしないと射精させられない。射精させられなければ、きっと浩司は今日の事を聴に告げる。そうしたら和正は停学だろうか、それとも退学……。

すれ違いこそあったけれど、やっぱり和正は自分を助けに来てくれる。そんな彼を守るのは自分だけ。たかがおちんちんを啜えるぐらい平気。そう思った。

「んちゅ、んぶう！ んぶ、んぶ、ごく……んちゅ……ちゅ、んふうつぶはあ……むちゅ……」

じれ始めた浩司は優奈の頭を両手で掴むと、乱暴に、物のように前後させ始める。

「んぶう！ んぶちゅぶ！ んふう！ むちゅ……」

チンポに歯をたてまいと大きく口を開く。口腔内では頬や舌の奥、喉の奥とチンポを押し付けられる。

熱をもっていて、すごく固い浩司のチンポ。彼の粘液が口いっぱいに溢れ、唾液に押されて喉の奥へと消えていく。

「んぐ、んごく……ごく……」

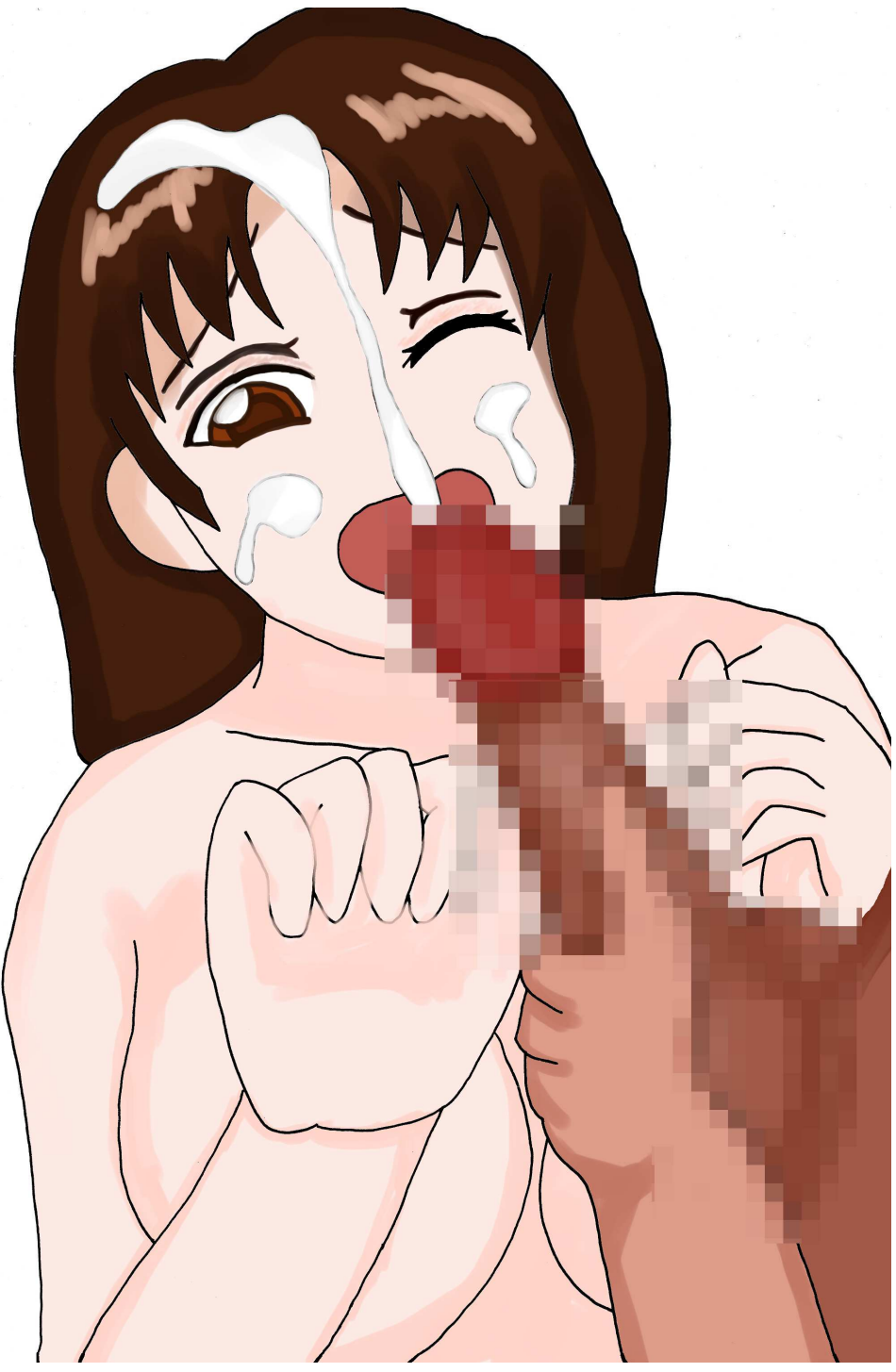
「うわあ、優奈ちゃん、俺の我慢汁飲んでるとか？ やっぱ、エロエロだわあ、優奈ちゃんエロエロ委員長だね！」

優奈の喉が鳴るのを見て浩司は楽しそうに煽る。その浩司の顔つきにも徐々に余裕が薄れ、声も途切れ始める。

「ああ、いいよ、優奈ちゃん、すごいすごい、そのままそのまま……」

「うぶう、んちゅ……ごく……んちゅ……ぶちゅちゅ……ぬむちゅ……んうぬう……ふうん！」

まだ終わらないかと恨めしそうに浩司を見上げる優奈。



目が合った。細くなった目。彼は彼女の頭頂部を掴み、ぐっと股間のほうへ押し込んだ。

「うっ！ 優奈ちゃん！ いく！ いくぞ！ 飲め！」

「！！ んぐう！ ぶふ！ んっ！ ぬぐうぐう……ん！ んごく……ごく……！！」

びんっ、びんっ！ とはじけるようなチンポ。口腔内、喉の奥まで突き入れられたとき、それが上下して、青臭い、苦い汁を大量に吐き出した。

「ぬぶう！ んぐ、ふぐう！！ んぐぐ、んふうん！ んっ、ん！ ん……げほ、げほ……げほ……」

反射的に、喉が塞がれまいと汁を飲み込んだ。ごくごくっ、けっこうな量を飲見下した。それでもチンポは暴れるのを止めない。

びゅっびゅと聞こえてきそうなぐらい勢いよく放たれる汁。喉の奥を閉じようとすると、逆流するのか鼻の方へ上がって来る。

「ん……！！ んう、げほ……げほ！」

青臭い匂いが鼻にこびりつく。臭い。生暖かくて気持ち悪い。

「うっ、うっ……はあ……はあ……あゝ、すげ……いっちゃったわ……」

ようやく浩司の手から力が抜けた。優奈は弾かれるように背を向けると、げほげほと激しくせき込む。そのまま喉が切れてしまうかと思うぐらい咳き込み、プールのお湯を口に含み、がらりと大きくうがいをする。

「ごろごろごろ……べっべっ……げえげえ……」

お湯に混じって見える白い濁り汁。排水溝へ流れるとひっかかり、泥っと流れ落ちていく。

白い濁り汁。青臭い臭い。あれがもしかして……。

「優奈ちゃん、どう？ 美味しかったでしょ？ けっこう溜めておいたから濃かったじゃん」

「……」

「苦かった？ ねえ、苦いんでしょ？ おら、答えろよ」

「……にが……かった……です」

「ふーん、そっかあ、それが大人の味だよ。よかったね」

浩司は頷く優奈を見て、おっぱいをぐにゅっと揉み抜く。けれど呆然とする彼女はなんの反応も示さない。せいぜい痛みに顔を歪める程度。それでは女のおっぱいという感じも薄く、浩司はつまらなそうにプールを上がった。

「ま、がんばったしい？ 今日の事は杉田に言わないで置いてあげるよ。じゃね？」

「……」

正直、彼が約束を守ってくれるのか、今更ながら不安になる。それでも捨て台詞を信じよう。

「がらがらがらがら……べっべっべ……」

もう一度、もう一度、まだもう一回、塩素が入っているならきつと水道水より殺菌力・消毒力が強いはずだからもう一回……。

お湯を掬い、何度もうがいを繰り返していた……。

「っはあく泳ぐのってたんのっしいくなあく！」

市民プールの受付で和正達がコーヒー牛乳を飲んでいると、浩司の場違いな大声が聞こえて来た。大吾と浩司に挟まれる格好の文雄は意外な顔合わせだった。

「なあ、イインチョもそう思うだろ？」

「う、うん。泳ぐのって楽しいね」

「だろ？ また俺らが練習ついてやっからよ」

ばしんと背中を叩く浩司に、文雄は前のめりになって、そのまま倒れる。

「なんだなんだ、もうへばったのか？ だらしねーな……」

「……………あいつらほんとウザイ」

向かいの女子更衣室から千絵が顔を出す。彼女は粗雑な浩司と大吾にあからさまに嫌そうな視線を向ける。ついでに和正達をみると、これまたゴミを見るかのように視線を逸らす。

「……………」

俯きながらとぼと歩く優奈が女子更衣室からやってくる。水着バックをお尻に隠し、ワンピースの裾をしきりに触っていた。

「……………優奈……、市川さん、どうかしたの？」

最初は戸惑ったが様子のおかしい優奈を見て無視できるはずもなく、和正は椅子をひいっと飛び越えて彼女の前に立つ。

「わっ！ わわ……」

着地する反動でワンピースがふわっと翻ると、優奈は変に慌てていた。

「なあ、大丈夫か？ 熱でもあるのか？」

「ん、何でもないよ。平気……」

笑顔を繕う優奈だが、声が変わった。少し枯れているような、そんな声。

「本当か？ なにか隠して無いか？」

強い口調で言うと、彼女は少し驚いた様子で何かをしやべろうと口を開く。

「えと……あつ」

何か黒い線が見えた。昔の映画やドラマに時折あるようなモノ。

優奈は口元に手を当て、何かをつまむと口を閉じる。

「何でもないよ。ごめん、ちょっと疲れただけだから……」

「そうか？ ……なあ、市川さん」

「おい、田所！ お前、なに優奈ちゃんいじめてんだよう！ コノヤロー」

浩司がいるせいか大吾は強気でやってくる。さっきのお返しとばかりに襟首を掴み睨む。

「なんだよ、やるか？」

「あ？ お前さ、なんか問題起こしたら停学なんだろ？ どうなんだ？」

「……………そうだよ。けど、俺が喧嘩かわねーとも思ってたのか？」

体格差は頭一つ、半分程度あるけれど、真面目に水泳に勤しむ和正は見た目よりがっしりしている。身体付きこそずんぐりしているが、それは水泳を長年続けているためで、充分な体力がついている。

襟首を掴む手を掴み、親指を立てて力を込める。

「こいつ…………ぐぐ」

粹がった手前、退くことができない大吾。手首に食い込む親指に顰めた顔に脂汗が浮かぶ。

「なにしているんだ！ 田所！」

それを咎めるのは再び文雄。彼自身、大吾と浩司にいいように遊ばれているにもかかわらずに和正にばかり噛みつく。

非力な彼では和正を引き離すことはできないが、腕一本程度ならと抗う。

「くっ、つてえ……」

大吾は爪痕の残る腕を見ながら憎々しげに和正を見る。

「君はそうやっていつでもどこでも問題を起こすんだな。このことは先生に報告を……」

「だめ！」

優奈のしゃがれ気味な叫びが文雄を怯ませる。

「……優奈さん、喉、どうかしたの？」

「なんでもないの。ただちょっとプールの水飲んじゃって、調子がおかしいだけ……。それより、皆仲良くね。

笹井君も和正君もふざけてただけだし、そんなおおごとなんかにしないでね。ほら、皆仲直りしてよ」

「そうだよな、俺も優奈ちゃんの意見に一票！」

珍しく静観を続けていた浩司が上機嫌でしゃばって来る。

「そんじゃさ、優奈ちゃん、仲直りってことで、これから一緒に遊びいかな〜い？」

「ご、ごめんなさい。今日は家に帰ってゼミの予習と復習があるから……」

「えー、なんで〜？ 優奈ちゃんがいいたんじゃ〜ん、仲直りしようよ、遊びいこーよー！」

浩司のネコナデ声は気持ち悪く、皆顔を顰めていた。

「おいおい、大崎、お前、午後は補習あるじゃん。出ないと杉田が怒るぞ」

助け船を出そうと芳雄が口を挟むが、浩司は三下程度にしかみていない彼の意見など無視する。

「ねーねー、いーじゃーん！ ほら、あそびいこーよー！」

「だめだよ。ちゃんと出席しないとダメだよ。ほら、大崎君ちゃんと補習受けてね。遊ぶのはそれからにしようよ」

掠れながらもわざとらしく優奈は明るい声を出し、言い訳を作っていた。

「ふーん、そういう態度なんだ……」

むっとした表情で優奈を見下ろす浩司。彼女はびくっと肩を震わすと、視線を外に向ける。

「うん、わかったよ。そんじゃさ、遊びに行くのはまた今度だね。そうだ、優奈ちゃんもイインチョも水泳の練習の続きしないかね？ 次の補習のとき、鬼瓦第二校のプール来てよ。そこで一緒に練習しようぜ」

「練習なら和正君も……いいよね？」

「ん？ 俺もか？ 補習のあとなら俺も練習したいし、別にいいぞ」

「お前はだめだ！ 田所、君が居ると揉め事が起こるじゃないか。せつかくの練習の邪魔をしないでくれたまえ！」

「え！」

「お前なあ、委員長、少しは空気を……」

和正には威勢よく噛みつく文雄に芳雄は頭痛そうに頬を掻く。

この場で虚勢を張れる相手が和正か芳雄だけらしく、必死で食らいつく。

「なあイインチョ、俺らと練習すんよな〜」

「え、それは……」

「え、それは……」

とはいえ、浩司に組よられるとびびりだし、口ごもる。芳雄はそれを見て額をパチンと叩き「だから言ったのに」と言いたそう。

「田所抜きで練習な。ま、そういうわけだから、お前はせいぜい大人しくしてろよな〜」

「……」

浩司は高笑いしつつ、文雄を連れて背を向けた。急場作りの友達ごっこに薄らぎむさを覚えつつ、和正は優奈を見る。

「なあ、大丈夫か？　なんか変だけど」

「うん……平気だよ。和正君、心配しすぎだし……」

浩司が居なくなったことであからさまにほっとする優奈。彼女はようやく顔を上げると、にこっと微笑んでくれる。

笑顔を見せてくれたのはいつ以来だろう？　そう思うには一か月も無いが、それでも酷く遠かった気がする。

「今日はありがとうね。心配かけて……えと、さ、あとで……」

「優奈ちゃん、早く行こうぜ」

浩司の呼ぶ声がすると、また陰りが見える。

「ごめんね。それじゃ……」

「ああ」

早口でまくしたてる優奈の声はかすれたまま。出入り口のドアが開くとき、優奈は慌てた様子でワンピースの裾をおさえていた。

「うーん、大丈夫なのかな……」

はつきりいって不穩、不安な空気に和正は眉を顰めていた。明らかに友好的に見えない浩司と文雄。水泳の練習などろくにできるはずもないのに、一体何を企んでいるのか？　考えると雑巾になった気分になる。身体をねじれば良い案が絞りでると良いのに……。

そんなことを考えていると、へらへら笑う芳雄が見えた。

「……なんだよ、気持ち悪いな」

「ん？　そうか？　ああ、まあな」

「なにがそんなに楽しいんだよ。こっちはいらいらしてんのによ」

「だってさ、さっき市川さん、お前のこと、名前で呼んでたじゃん？　仲直りしたんだなって思ってたさ」

「な！　別に俺は喧嘩なんてしてねーよ！」

言われて気付く。優奈が先ほど自分のことを昔のように……。

＊＊

自室に引っ込み、夏休みの課題を広げる和正。

答えを写してわかった気になりながら、これがあと20ページもあると思い、うんざりしていた。

「……」

気分転換に漫画を読もうと手を伸ばす。けれど、頭に入っていない。理由はなぜだろう。今日、芳雄が言った余計なひと言が原因だ。

——市川さん、お前の事、名前で呼んでたじゃん？

少し前ならいつも通りだったこと。

喧嘩をしたわけでも無いのだし、ただの気まぐれ。

呼び方だって名前で呼び合う方がおかしい……。

では、芳雄はなぜ自分を名前で呼び、文雄や浩司は苗字で呼ぶ？

親しみが違うから……。

それなら優奈が名前で呼んだことは？

言い訳はやはり言い訳だと帰結する。

「喧嘩したつもりなんて無いんだけどな……」

距離を取ったつもりならある。そして、優奈も距離を取った。

言われた通りに電話した……。

あの一言が、今も耳に残る。

意外と自分は腐った性根なのだなと思う。同時に漫画を壁に叩きつけていた。

「わっ！　びっくりした」

ドアの向こうから母の声がした。

「わ、なに？　母さん」

「急に壁がどんって音したから、お母さんびっくりしちゃったわ……。はい、優奈ちゃんから電話叫び声でノックは省略して母がコードレス片手にやって来る。」

「んふふ、デートのお誘いかしら？　そういえば来週末は鬼瓦神社でお祭りだもんね」

「うっさい！　ったく……」

ひやかされた和正は思わず受話器を投げそうになり、枕を代わりに投げた。

『もしもし、和正君？』

もうかすれてはいない。いつもの優奈の声だった。

「なんだ、ゆう……市川さん、どうかしたか？」

『……なんで？』

「なんでって、急に電話なんて……まあ、急ってほどじゃないか。やっぱりプールでなんか……」

遅くて、なんで市川さんなんて呼ぶの？』

「それは……その」

咎めるような声が胸に刺さる。けれどそれは傷口を抉り、どす黒い物を漏らす。

『……うふふ……なんちゃって……』

「……また電話するように言われたからか？」

それが冗談めいた笑い声に重なった……。

『……！』

「……あ」

慌てて口を押えるけれど、既に言葉は彼女の元へ……。

『……ごめん。あの時は、その、文雄君に、そうしたほうが良いって言われて……だから』

素直に謝る優奈だけれど、あの時の悲しさ、裏切られた気持ちさがこみあげる。

うっと息が詰まり、和正は受話器から耳を遠ざける。

吐ける程やわな身体ではない。けれど、頭がぐわんぐわんいう。

『………』

受話器の向こうでは優奈が何かを喚いている。

言い訳だろうか？

聞きたくない。

それなら、どうしてそんなことを口にしたのだろう？

責められたから？

市川さんと苗字で呼んだことを？

それは最初に優奈が……。

けれど最初に距離を作ったのは和正自身……。

なら、耐えねばならないのか？ 耐えたと決めたのだから……？

「ごめん、言い過ぎた」

「ええ、聞いてよ、和正君……あのね、あたし……」

「……………」

ぶつりと音がした。自分は何も押していない。向こうから切るには唐突過ぎる。

リダイヤルを押し、受話器を耳に当てる。けれど、無機質な音がツーツートン……。

もう一度リダイヤルを押す。やはりだめ。また、それでもだめ……。

「……………優奈、俺……」

何がしたかったのだろう。

しばらく呆然と立ち尽くしていた……。

十十

「ねえ、聞いてよ、和正君！ あのね、あたし……」

ぶつと音がして電話が切れた。和正が切ったのだろうか？ わからない。けれど、切られてもしようがない。

和正は知っていた。

あの時、電話をした本当の理由。

落ち着かせる為に電話をしよう。疑っていると思われると自暴自棄になるかもしれない。

その時は優奈もそう思った。

けれど、それが知られていたとしたら？

ブルマ泥棒の犯人は今もわからないけれど、それを疑われた和正を宥める為に電話をした。その背後の理由が知られたとしたら、彼からすれば優奈からも疑われていると思うに決まっている。

靴から出たのだから疑われて当然。

そう言いきりたくない自分が居た。けれど、信じ切るには彼が遠くなっていた。

自分を正当化する言葉はいくらでもある。けれど、彼を疑って、傷つけていたことも事実。それなのに、彼は今日、自分を助ける為に来てくれた。結果は……。

それでも和正は、和正は……。

「あたし、なんであんなこと……」

文雄の口車に乗って和正を騙すような電話をした後悔が、今更胸に響く。

慌ててリダイヤルを押すけれど、電話はどこへも通じない。

もう一度、もう一回、少し待ってもう一度、でも通じない。

「和正君……」

しばらくしてもう一度リダイヤルを押そうとした時、階段を上がる母の足音がした。

「優奈？ 電話持って行ってない？」

「あ、ごめん、今返すよ」

母の電話は長い。多分今日はもう、掛けられない。

本当なら何を話すつもりだったのだろう。

今週末、鬼瓦神社で一緒に来てほしい。

またアイツが来るから。

怖いから……。

けれど、そんなことを頼めるのか？

疑っておいて、都合の良い時だけ一緒に……？

自分の卑劣さが嫌になる。

黄土色を濃くして出来上がった黒の、どろつとして粘りつくような感情。それが頭の中で少しずつ白くなり、喉に絡まり始めると、優奈は台所へ駆け出して、食塩をマグカップにいれてうがいをした……。